

# 篠ノ井南条遺跡

—長野都市計画(株)布施高田宅地造成地点—

浅川扇状地遺跡群

# 辰巳池遺跡

—アルピコ建設(株)吉田宅地造成地点—

浅川扇状地遺跡群

# 本郷前遺跡

—大成産業(株)三輪共同住宅建設地点—

2004・1

長野市教育委員会

## 序

竪穴住居や土器など土地に埋蔵されている文化財は、郷土の成り立ちや文化を正しく理解する上で欠くことのできない貴重な遺産です。まさに「国民共有の財産」「土地に刻まれた歴史」と言われる所以がここにあります。

現在長野市内では500ヶ所以上の集落遺跡または包蔵地が周知されています。こうした埋蔵文化財は地中にそのままの状態では保存し、後世に伝えていくことが理想的な在り方と考えます。しかし、生活・経済の向上のための開発事業が進展し、その影で埋蔵文化財は破壊される運命にあります。そこで次善の策として発掘調査を行い、記録として後世に残す手段が選ばれます。

ここに長野市の埋蔵文化財第103集として上梓いたしました本書は、平成15年に実施した民間開発事業に伴う3遺跡の発掘調査報告書であります。

各調査の規模は比較的小さなものでありましたが、貴重な成果を発見することができました。ここで得られた成果は過去の時代に生きた人々の生活の一端を垣間見たにすぎませんが、地域史解明の一助として関係各方面に広くご活用いただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護にたいする深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年12月

長野市教育委員会  
教育長 立岩 睦秀

## 例 言

- 1 本書は、長野都市計画（株）布施高田宅地造成・アルピコ建設（株）吉田宅地造成・大成産業（株）三輪共同住宅建設の各事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、それぞれの委託契約書に基づき長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直営事業として実施した。
- 3 調査地・調査面積・調査期間・遺跡の略号等は、各遺跡の副表紙の例言に記した。
- 4 調査対象地は、宅地造成地にあつては地下埋設設備等で遺跡破壊が懸念される道路敷き部分、共同住宅建設地では建物敷地部分をそれぞれ対象にした。
- 5 本書は、発掘調査によって検出された遺構・遺物を中心にその基本資料を提示することに重点をおいた。
- 6 基準点測量・遺構測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準として、コーデックシステムを援用するため（株）写真測図研究所へ委託した。
- 7 遺構図は、住居址のみ1：80で提示したが、土坑・溝址等は検出規模により各遺跡間に不統一がある。断面図の数値は標高（m）を示す。
- 8 掲載図中、SB（住居址）・SK（土坑）・SE（井戸址）・SD（溝址）の略号をもちいた。住居址図中、鎖線内は堅緻な床面、アミ部は焼土・炭化物の範囲を表す。
- 9 遺物図は、1：4の縮尺を基準とするが、本郷前遺跡の拓影図のみ1：3で提示した。弥生式土器・土師器は断面を白抜き・須恵器は黒塗り・灰釉陶器はアミ掛けで、赤色塗彩部を密薄アミで、黒色処理部を粗点アミでそれぞれ表示した。
- 10 本書が刊行に至るまでの役割分担は、調査の体制の節に記載する。
- 11 調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

# 篠ノ井南条遺跡

—長野都市計画(株)布施高田宅地造成地点—

## 例 言

- 1 本書は、長野都市計画(株)代表取締役長澤一喜と長野市長鷺沢正一との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき実施した緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市篠ノ井布施高田字南条1051-1番地他に所在する。
- 3 調査は、平成15年5月28日から6月12日に実施し、約500m<sup>2</sup>を調査した。
- 4 遺跡の略号は「SNMJ」である。

## 目 次

I 調査の経過	1
1 調査の事務経過	1
2 調査日誌	1
3 調査の体制	2
II 調査地周辺の環境	3
1 地理的環境	3
2 考古学的環境	4
III 調査	6
1 試掘調査	7
2 遺構と遺物	7
住居址	7
井戸址	8
土坑	8
溝址	9
小穴群	9
IV まとめ	15



## 挿 図 目 次

1 図	調査地周辺の字境図.....	4
2 図	調査地及び関連遺跡分布図.....	5
3 図	調査地・布施神社・布施高田館跡位置図.....	5
4 図	遺構分布図 .....	6
5 図	検出遺構実測図.....	10
6 図	検出遺構実測図.....	11
7 図	遺構出土土器実測図.....	11

# I 調査の経過

## 1 調査の事務経過

平成15年3月25日付 長野市長（建設部建築指導課）あて都市計画法第32条の規定による「開発行為に関する事前協議申出書」の提出がある。4月2日 担当課長より文化財保護法に基づく協議がある。

4月3日付 開発予定地は「布施城跡」の近接地であり、試掘調査等の保護措置が必要の旨を記した「回答書」を提出する。

5月14日付 長野都市計画（株）代表取締役長澤一喜より「埋蔵文化財試掘調査依頼書」等の提出がある。

5月16日・21日 重機提供による試掘調査を実施し、遺物包含層・遺構の存在を確認する。

5月27日付 文化財保護法57条の2第1項の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」の提出がある。

5月28日付 発掘調査等の保護措置が必要の旨を記して長野県教育委員会教育長宛に進達する。

5月26日付 「埋蔵文化財発掘調査依頼書」の提出がある。

5月27日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。

5月28日～6月12日 発掘調査を実施する。

6月6日付 （株）写真測図研究所代表取締役杉本幸治と遺構測量等に係わる「業務委託契約書」を締結する。

6月9日付 県教委教育長より発掘調査の実施に関する「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。

6月16日付 長野都市計画（株）代表取締役長澤一喜宛に「発掘調査終了届（通知）」、県教委教育長宛に「発掘調査終了報告書」、長野南警察署長宛に「埋蔵文化財の発見について（通知）」の書類をそれぞれ提出する。

## 2 調査日誌

5月26日・27日 重機による表土除去作業を行う。

5月28日 遺構検出作業終了後、北区の溝址から調査を開始する。

5月29日 SB1、SK1・2の調査。SD1・2写真撮影。

5月30日 SB1・2の調査。SK1・2の調査・写真撮影。

6月2日 SB1写真撮影。SK1～3、SD1の調査。

6月3日 SB3、SK3～9、SD3の調査。

6月4日 SB3、SD4の調査、SK1・4・5写真撮影。

6月5日 SB3、SK11、SD4・5の調査。SK4・7～9写真撮影。

6月6日 SB3写真撮影。SD4、SE1の調査（～10日）。土器洗浄（～11日）。

6月10日 SD4、SE1写真撮影。遺構測量。

6月11日 遺構図結線。SK1土層実測。器材撤収。

6月12日 補足調査。



I-1 西区全景（南より）

### 3 調査の体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査および指定史跡等の保護保存にかかわる発掘調査は長野市教育委員会文化課が担当し、開発行為に対応する緊急発掘調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。

篠ノ井南条遺跡における組織・業務分担は以下の通りである。

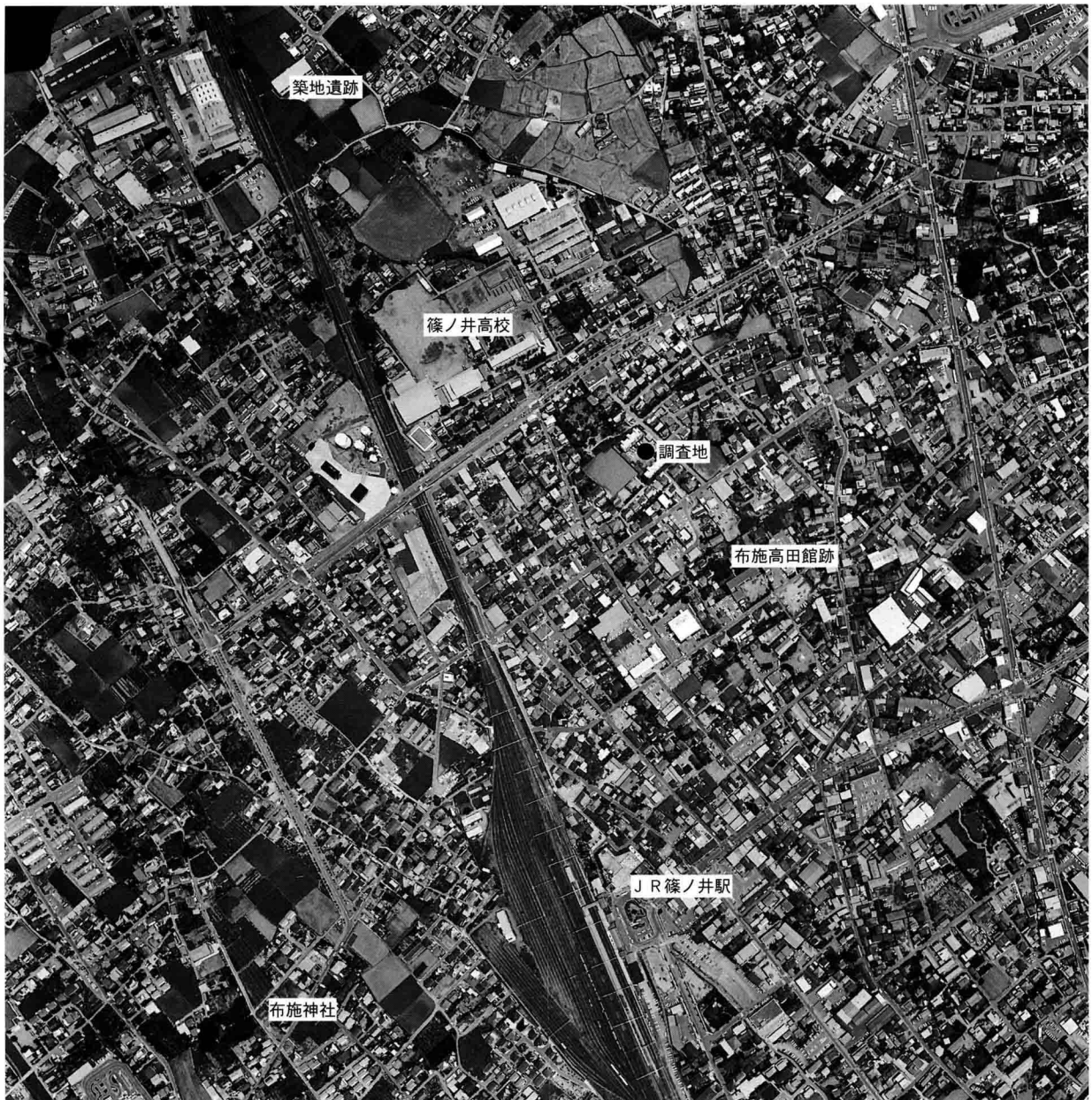
調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 睦秀（発掘調査主体者）
総括責任者	副参事兼埋蔵文化財センター所長	磯野 久夫（統括責任者）
庶務担当	係長	山岸 恒雄（経理・契約事務、庶務）
	職員	吉村 久江（庶務）
調査担当	局主幹兼所長補佐	矢口 忠良（報告書編集）
	係長	青木 和明（保護協議）
	〃（兼務職員）	千野 浩
	主査	飯島 哲也
	主事	風間 栄一（主任調査員、遺構・遺物写真）
	主事	小林 和子（保護協議、試掘調査）
	専門員	小野由美子
	専門員	堀内 健次（調査員）
	専門員	宮川 明美（調査員、遺物実測）
	専門員	清水 竜太
	専門員	山下 大輔
	専門員	遠藤恵美子
	専門員	長瀬 出
	専門員	山野井智子
発掘従事者	石坂好子・塩原恵美子・清水節子・中澤ヒデ子・福島幸子・松崎とみ子・丸山美知子 宮崎和子・山田令子	
整理従事者（調査員）	青木善子・池田寛子・武藤信子	
遺構測量等委託	（株）写真測図研究所代表取締役 杉本幸治	

発掘調査の実施にあたり、長野都市計画（株）営業部長三村修二氏にはなにかとご協力をいただいた。感謝申し上げます。

## Ⅱ 調査地周辺の環境

### 1 地理的環境

篠ノ井市街地は川中島扇状地の扇端部に位置する。しかし、鉄道の開通以来市街化が進み調査地周辺の地形的特色を読みとることは困難である。調査地においても戦前から戦後にかけては病院が存在したと聞くし、更地前は会社関係の寮が建設されており、土地利用にめまぐるしい変遷をみることができる。調査地の標高は357m台で、西に岡田川・東に犀川から取水した上中堰に囲まれて、扇状地形は南方向に緩傾斜軸があるようである。この地域で興味ある字名を拾うことができる（1図）。北から中条・四辻・上六反・南条・一ノ坪・下六反・市ノ坪等がそれで、条里制に基づく名称と考えられる。しかし、市街化等の開発が進み旧来の地割りをみることが



Ⅱ－1 調査地周辺の航空写真（平成2年撮影（株）ジャスタック）

できない。2節で記する築地遺跡でも、篠ノ井高校校庭西側から時期不明の水田址が確認されているものの条里遺構は確認されていない。

## 2 考古学的環境

この地域は（財）長野県埋蔵文化財センターによる北陸新幹線建設に伴う発掘調査が実施されるまで遺跡の所在は不明な空間であった。この発掘調査は平成5年度から6年度にわたって行われたもので、遺跡の範囲を篠ノ



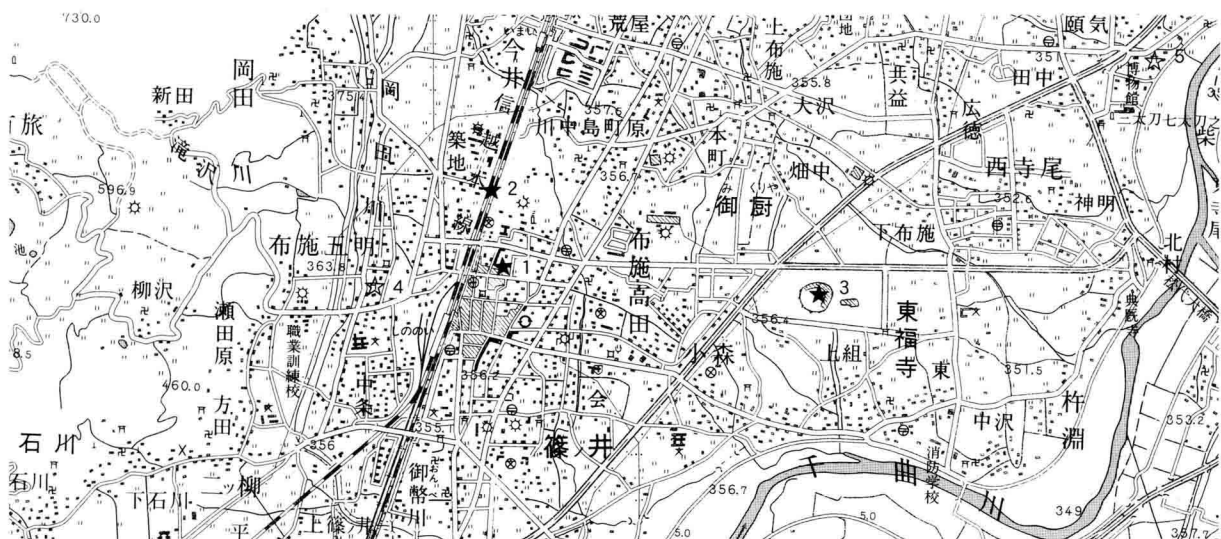
1 図 調査地周辺の字境図（1：20,000）



井高校の北側に展開する扇状地内の微高地に求めている。遺跡名を築地遺跡と称し、検出遺構の年代は平安時代から中世のものである。平安時代では住居址28軒が確認されており、9世紀後半から10世紀代の集落跡とみられている。中世では居住施設と考えられる竪穴状遺構4軒・掘立柱建物址7棟が検出され、竪穴から掘立柱建物への変遷が想定されている。また、竪穴状遺構からはカワラケ・青磁・捏鉢・播鉢・山茶碗・銭貨等が出土しており、その年代を13世紀後半から14世紀に比定している。

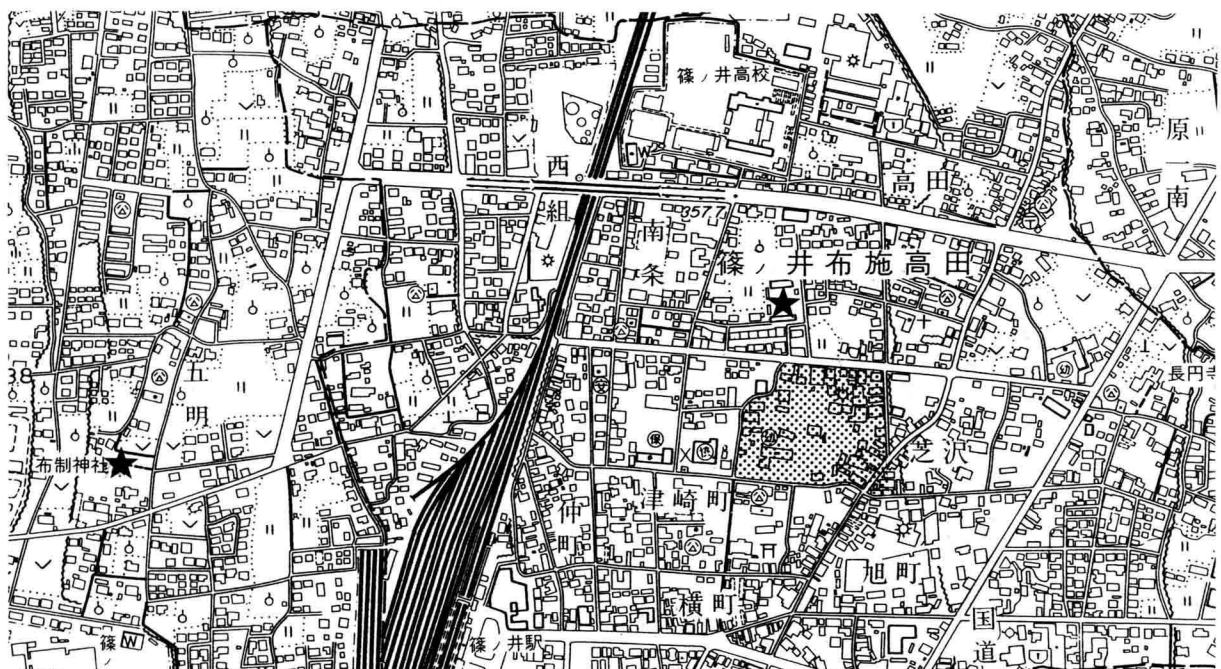
この他に、本調査地の南側に「佃」の字名があり、ここに鎌倉時代以降の布施高田館跡が存在し明治初年頃まで原形を留めていたという。規模は南北130m、北辺東西120m・中程115m・南辺70mを想定されている。伝承では布施氏代々の館跡とされる。

〔参考文献〕(財)長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報10・11』平成6・7年  
更級埴科地方誌刊行会『更級埴科地方誌第二巻』昭和53年



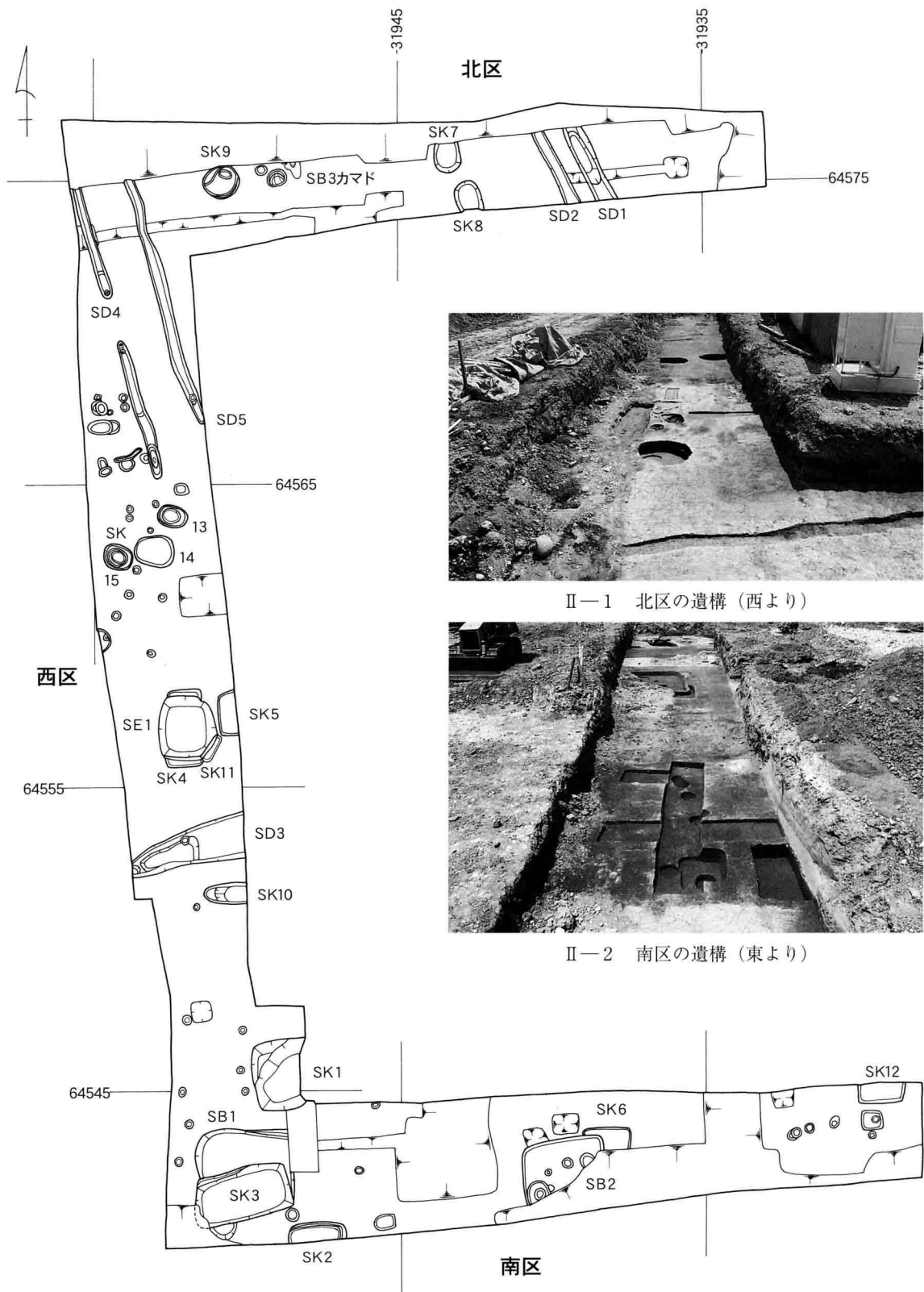
1. 南条遺跡 (調査地) 2. 築地遺跡 3. 南宮遺跡 4. 布施神社 5. 願気神社

2図 調査地及び関連遺跡分布図 (1:50,000)



3図 調査地・布施神社・布施高田館跡位置図 (1:10,000)

### Ⅲ 調 査



4 図 遺構分布図 (1:200)

# 1 試掘調査

**調 査 日** 平成15年5月16日・21日

**調査の方法・目的** 事業予定地内の任意の地点に試掘坑（L 2 m×W 2 m）を2ヶ所設定し、小型重機により掘削する。坑内土層断面の観察により、遺物包含層の有無及び深さを確認する。併せて遺構の平面形態を露呈し、遺跡の内容を把握することにより調査日数・調査費を積算する。

**調 査 結 果** 現地表下25cmまでは盛土、第2層45cm黄褐色砂質土、第3層68cm暗褐色砂質土、第4層黄褐色砂質土の土層序が認められた。第3層から土器片・炭化物を検出し、遺物包含層とする。4層からは遺構の落ち込みがみられ、基盤層と史料される。平面検出調査では住居址溝址等が確認された。

以上の所見から工事着手前に記録保存を目的とした発掘調査等の保護措置が必要である。

## 2 遺構と遺物

調査対象地はコの字形を呈しており、調査区の呼称を上辺東西を北区、南北調査区を西区、下辺東西を南区とする（4図）。

遺構は調査地全体に認められるが、散在的な在り方を示す。また、旧建築物の基礎工事により攪乱箇所が各所にみられ、住居址においては全形を露呈したものはない。北区では住居址1軒（3号）・土坑3基（7号～9号）・溝址2条（1号・2号）、西区では井戸址1基（1号）・土坑7基（1号・4号・5号・10号・13号～15号）・溝址3条（3号～5号）と小穴群、南区では住居址2軒（1号・2号）・土坑4基（2号・3号・6号・12号）をそれぞれ検出した。総計では住居址3軒・井戸址1基・土坑13基・溝址5条である。

遺物の出土した遺構は少なく、それも破片出土のことが多い。総体的にみれば平安時代に比定されるものが多く、遺構の検出面を平安時代と想定すれば無遺物遺構もこの時期の所産と考える。ただし、検出面から数点の内耳土器片、1号井戸址・小穴から青磁片が出土していることから中世遺構の存在も考えなければならない。

### 1 住居址

**1号住居址（5図1）** 西区と南区の交差部に位置する。南側を3号土坑に掘り込まれ、東壁は試掘坑により破壊を受けている。基本形態は方形を呈するが、北西隅部は丸味を帯びる。規模は南北2.9m・東西3.2mを測る。掘り込みは中央に向かって傾斜を有し、最深部で25cm程になる。床面は軟弱で、柱穴・焼土等の痕跡はない。

遺物は須恵器高台坏（7図1）・灰釉陶器段皿（2）が出土しているのみである。この2種の土器には時期的な差があり、この住居址の機能年代を後者の土器から平安時代中期以降と推定する。

**2号住居址（5図2）** 6号土坑と重複関係にある。南東側半分程は既存建物により破壊を受ける。形態は方形を呈するものと思われ、東西2.7m程の小型の遺構である。掘り込みは南・東に傾斜を有し、最深部で18cmを測る。遺構内に4個の小穴が確認されているが、位置からして支柱穴とは考えられない。床面は軟弱であり、焼土等は認められない。

遺物は覆土から少量の土器片が出土しているが、図示できるものはない。

**3号住居址（5図3）** 調査ではカマド火床と思われる焼土塊と焼土を含む小穴・炭化物を多含する土坑を検出したのみである。形態・規模・カマドの位置等は不明である。

遺物は焼土塊上から土師器坏（7図3）が出土した他に、土坑から土師器甕片を検出した。



## 2 井戸址

**1号井戸址（5図5）** 西区中央に位置する。4号・11号土坑と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。土坑は付属施設との考えも捨てきれない。形態は隅丸長方形を呈し、長軸2.2m・東西1.9m・深さ1.75mの規模になる。掘り込みは直に近く、底面は小円礫混じりの砂層になり、鉄分の沈殿が認められた。覆土は上層が黄褐色砂層が主体をなし、中層は暗褐色から黒色粘質土と黄褐色砂質土・砂層が互層になり、最下層は暗褐色粘質土になる。中層の黄褐色系土は崩落土の可能性があり、埋め戻しの様相はみられない。

遺物は中層下の暗褐色粘質土層より平安時代の土師器坏（7図4）と龍泉窯系青磁碗片が出土している。青磁片を重視し、中世の井戸址と考えられる。

## 3 土坑

各調査区に点在する。遺物の出土が少なく、それも小破片であり、明らかに遺構と供伴関係あるものは1号土坑だけである。

**1号土坑（5図6）** 西区の南端に位置し、東側半分程は調査区域外に延びる。平面形態は方形を呈するものと思われるが、掘り込みにおいては楕円形態の土坑を内包する様相が見られる。規模は南北1.15m、南壁の掘り込みは最も深く82cmを測る。底面は鍋底状の丸味を有している。覆土は自然堆積と考えられ、炭化物を包含する互層がみられる。

遺物の出土は今回調査した遺構の中で最も多い。器種は食膳具を主体に、土師器坏（7図5・12）、黒色土器坏（6～11・13）・碗（14・15）がある。全てロクロ調整で、黒色土器の内面はヘラミガキが施され、放射状暗文が認められるものもある（7・13）。底部外面には回転糸切り痕を残すが、7のみにには更に外周をヘラケズリで調整している。これらの法量を見ると、6～13の口径の平均値は13.1cm、器高では4.25cmと比較的大型の部類に属する。また、土師器よりも黒色土器の個体数が凌駕していることから、時期を平安時代中葉の10世紀前葉に求める。

**2号土坑（5図4）** 東側半分は調査区域外に延びる。形態は長方形を呈するものと思われ、東西1.9m・東壁の深さ30cmを測る。底面は平坦で軟弱である。

遺物は土師器の小破片が数点出土したにすぎない。

**3号土坑（5図1）** 1号住居址と重複関係にあり、これよりも新しい遺構である。形態は長方形を呈し、長軸3.2m・南北1.7m・南壁の深さ55cmの規模になる。底面は鍋底状で軟弱である。覆土は暗褐色砂質土で、黄褐色粘土ブロックを含み明瞭ではないが数層の互層になるものと思われる。

遺物は土師器の細片が確認されているにすぎない。

**4号土坑（5図5）** 1号井戸址と重複関係にあり、北壁と南壁の一部が残存しているにすぎない。形態は長方形を呈し、長軸2.55m・東西1.1～1.25m・深さ45cmの規模になる。南壁の東側にも同様な掘り込み（11号土坑）が認められることから、1号井戸址の付属施設とも考えられる。出土遺物はない。

**5号土坑（5図5）** 1号井戸址の東に近接する。調査では西側半分程を検出したにすぎない。形態は長方形を呈するものと思われ、南北1.45m・深さ10cmの規模になる。底面は平坦で軟弱である。出土遺物はない。

**6号土坑（5図2）** 2号住居址と攪乱により全形は知り得ないが、長方形を呈するものと予想する。東西1.6m・東壁での深さ15cmを測る。底面は平坦で軟弱である。遺物の出土はない。

**7号土坑（5図7）** 遺構の西側は調査区域外に延びている。形態は卵形を呈するものと思われる。長軸の規模は不明であるが、東西の最大幅は0.9mを測る。南壁の深さは28cmで、底面は北に向かって上昇傾向にある。

南に隣接する8号土坑も近似する内容を有しており、セットとして機能して可能性もある。遺物の出土はない。

**8号土坑（5図7）** 7号土坑を反転したような形態になる。東西の最大幅0.9m・深さ30cmの規模である。出土遺物はない。

**9号土坑（5図8）** 3号住居址の西に位置する。形態は円形を呈し、二段掘りになる。最大幅1.15m・東側の深さ20cmを測る。底面は平坦で軟弱である。出土遺物はない。

**10号土坑（6図12）** 西区に位置し、遺構の東半分程は調査区域外に延びる。形態を長楕円形と予想する。最大幅0.7m・深さ10cm前後の規模になる。底面は平坦で軟弱である。3号溝址と併行関係にあることから溝になる可能性もある。

遺物の出土は黒色土器碗の底部破片を1個体確認したにすぎない。

**11号土坑（5図5）** 1号井戸址と重複関係にあり、東壁の一部のみ確認した。形態は方形を呈し、一辺1.0m・深さ約40cmの規模になるものと予想する。4号土坑と共に井戸址との関連も考えられる。出土遺物はない。

**12号土坑（5図9）** 長方形を呈する遺構と思われるが、北側半分程は調査区域外にある。東西1.55m・深さ30cmの規模で、床面は平坦で軟弱である。覆土に炭化物を比較的多く含む。出土遺物はない。

**13号土坑（5図10）** 楕円形を呈し、円形の掘り込みを内包する。長軸0.95m・短軸0.7mを測り、円形土坑は直径55cm・検出面からの深さ20cm前後の規模になる。底面は軟弱で北に傾く。出土遺物はない。

**14号土坑（5図10）** 13号・15号土坑の中間に位置する。不整形円形を呈し、長軸1.3m・南北1.0m・深さ15cmの規模である。底面は平坦で軟弱である。遺物の出土はない。

**15号土坑（5図10）** 形態は楕円形を呈し、13号土坑同様円形土坑を内包する。長軸1.0m・南北0.8mを測り、円形土坑は掘り込みに段を構成する。直径0.6m・検出面からの深さ35cmの規模になる。遺物の出土はない。

#### 4 溝 址

1号と2号溝址・4号と5号溝址は近接して併行関係にあり、共に同時期に機能していたものと思われる。また、この4条の溝方向がほぼ同じであることに注目して同様な機能を有していた可能性もあるが、その内容等は調査範囲からは得られなかった。溝址からの出土遺物は少量にすぎず、それも小破片である。

**1号溝址（6図11）** 北区の東側に位置する。幅35～50cm・深さ5～10cmの規模である。

**2号溝址（6図11）** 幅50～65cm・深さ10cm前後の規模であるが、深さ15cmの土坑状の掘り込みを内包している。掘り込みは溝内で収まり、南北の底面は鍋底状を呈し丸味を帯びる。

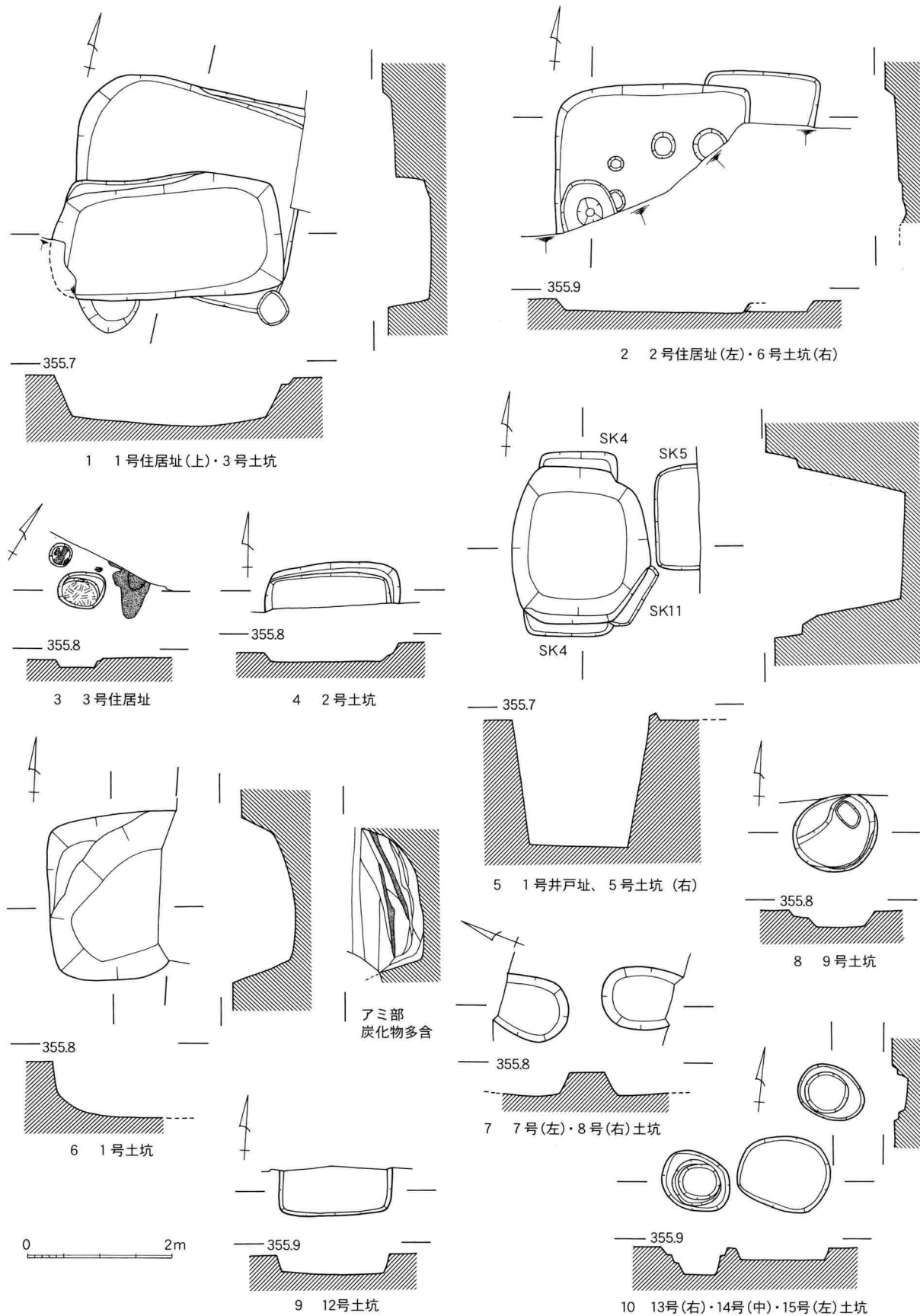
**3号溝址（6図12）** 西区の東側に位置する東西方向の溝である。幅は西から東に広がり、西端が0.4mで、東端では1.45mを測る。深さは西側で凹凸がみられ、8～15cmと浅い遺構である。性格は不明である。

**4号溝址（6図13）** 西区の北端に位置する。溝方向に断絶がみられる。幅20～35cm・深さ6～10cmの規模である。小穴を内包するが意味するところは不明である。

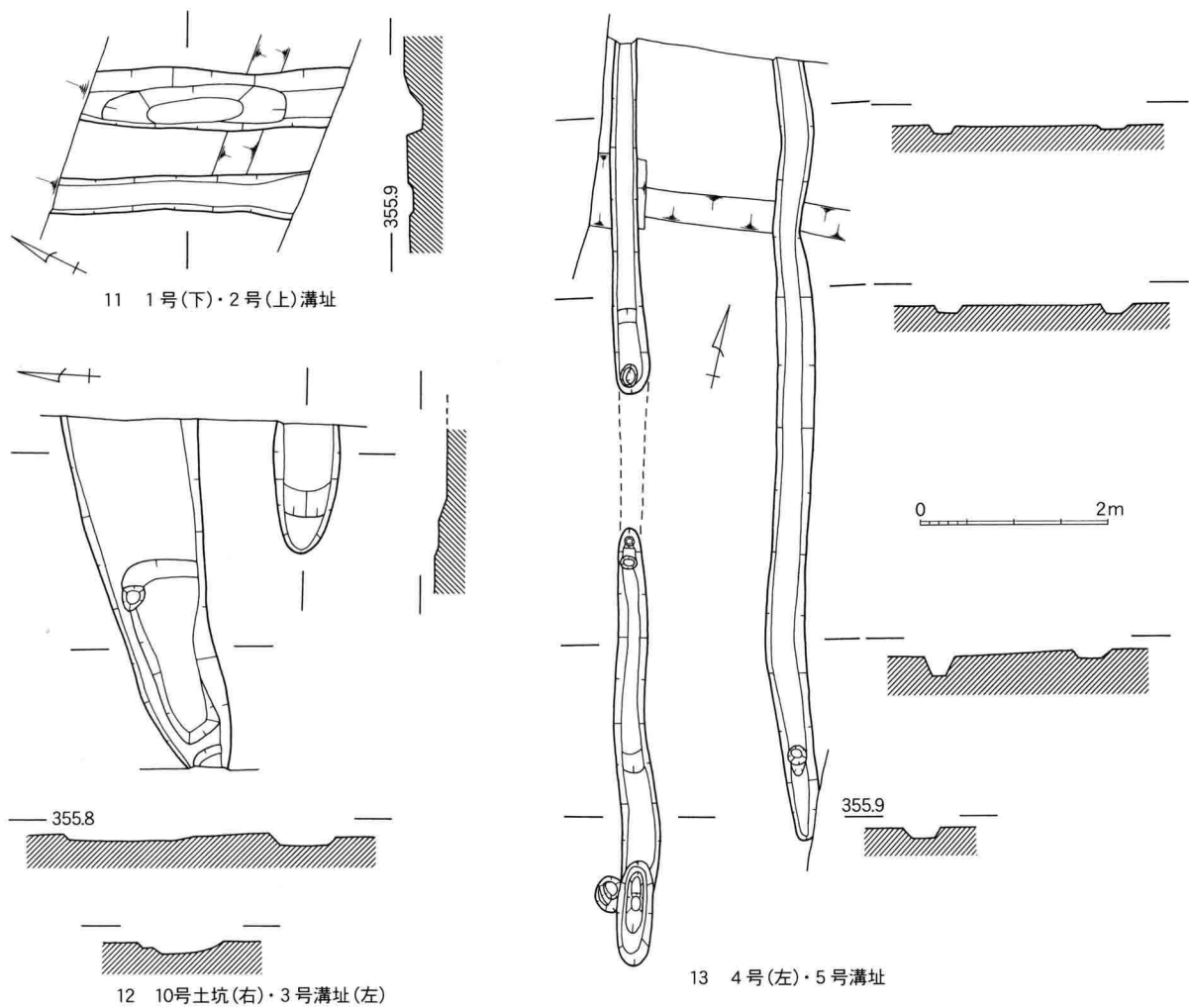
**5号溝址（6図13）** 幅30～35cm・深さ4～10cmの規模で、底面は北から南に傾斜を有する。

#### 5 小穴群

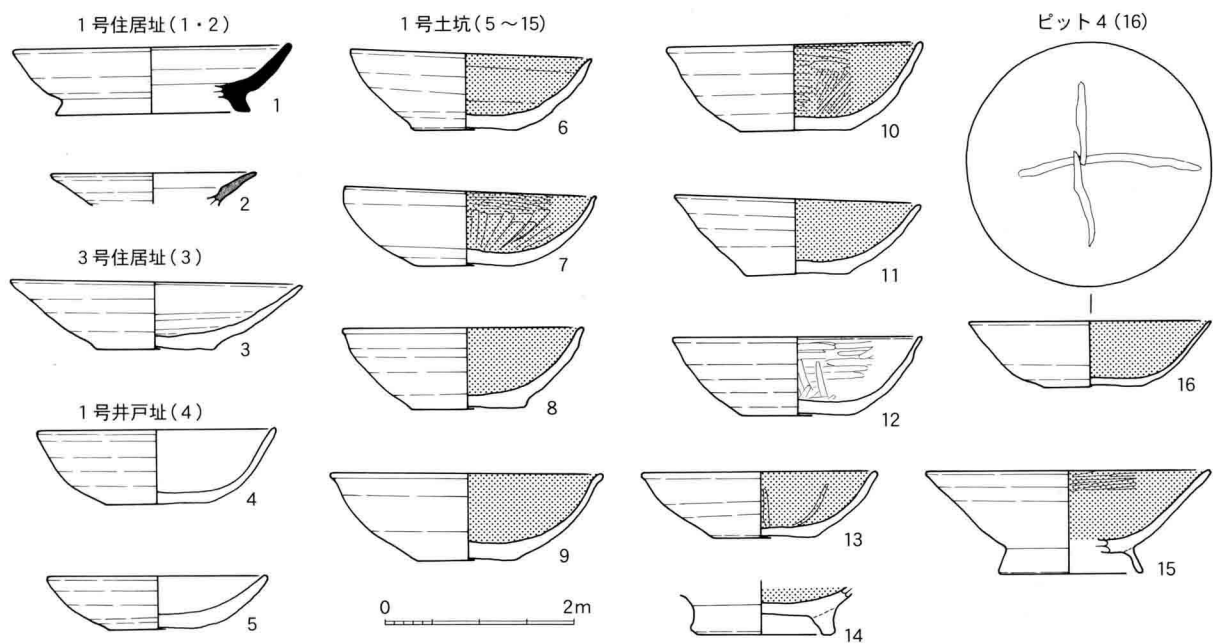
西区と南区にみられるが、小屋組配列になるものはない。ただし、西区北側の一群に直列的になるものが認められる。直径30cm前後のもので、柵的な施設が想定される。この小穴の一つから龍泉窯系青磁碗の小破片が出土しており、中世の所産と考える。



5図 検出遺構実測図(1:80)



6図 検出遺構実測図 (1:80)



7図 遺構出土土器実測図 (1:4)



Ⅲ—3 土層序



Ⅲ—4 1号住居址・3号土坑



Ⅲ—5 2号住居址（北より）



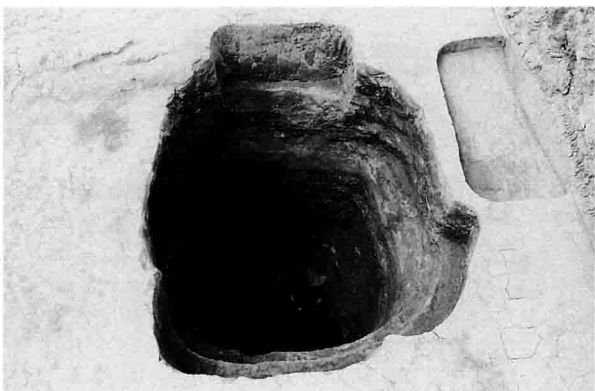
Ⅲ—6 2号住居址・6号土坑



Ⅲ—7 3号住居址（北より）



Ⅲ—8 3号住居址（東より）



Ⅲ—9 井戸址、4号・5号・11号土坑



Ⅲ—10 1号土坑





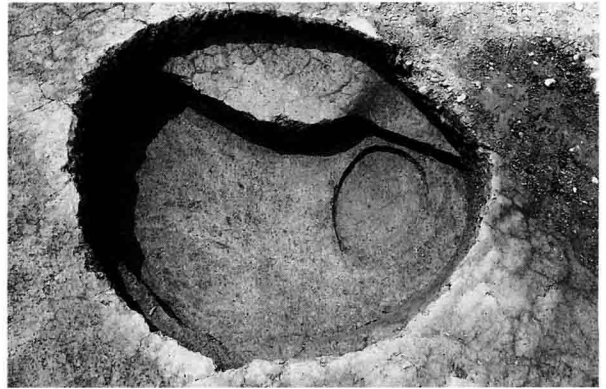
Ⅲ—11 2号土坑



Ⅲ—12 3号土坑



Ⅲ—13 7号·8号土坑



Ⅲ—14 9号土坑



Ⅲ—15 10号土坑



Ⅲ—16 1号·2号沟址



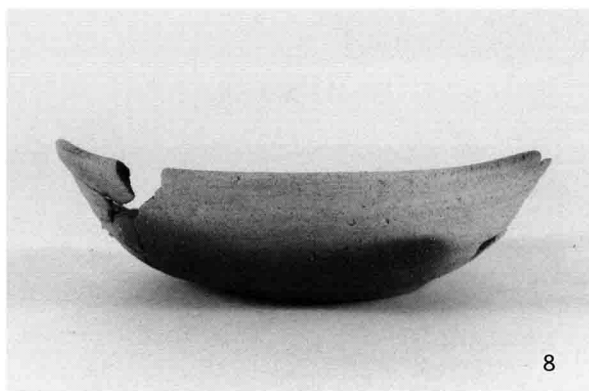
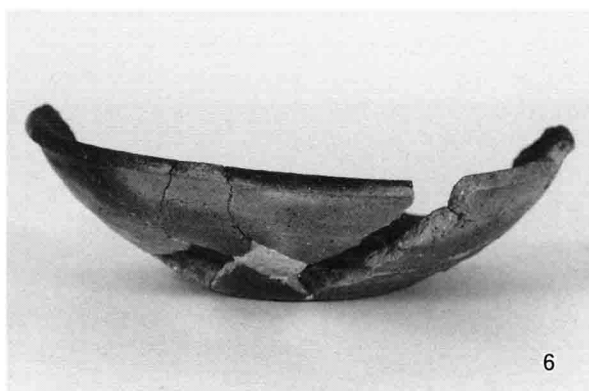


写真1 篠ノ井南条遺跡出土土器  
 1～6；SK1（1：11 2：10 3：9 4：13 5：7 6：8）  
 7；SB3（3） 8；SE1（4）  
 （ ）は各遺構出土遺物実測図番号

## IV ま と め

篠ノ井南条遺跡の範囲は定かでない。トレンチ的な調査であるが、住居址の存在が確認されたことは少なくとも平安時代中葉には小集落が形成されていたことを意味する。また、性格・意味するところは不明であるが、多数の土坑や溝址等人為的な掘り込みが認められたことは集落内で活発な各種作業が行われていたことを窺わせる。

平安時代の川中島扇状地には倭名抄と延喜式に記載された斗女・池郷・氷鉋の3郷、布施神社・氷鉋斗売命神社・願気神社の3社がある。このうち氷鉋斗売命神社は斗女郷・氷鉋郷に対応し、願気神社には池郷郷が対応するものと考えられる。斗女郷の中核集落跡は南長野運動公園地の南宮遺跡であることは間違いないところである(2図)。ところが布施神社に対応する郷はみあたらない。現在の布施神社は調査地の西約1kmの所に鎮座(2・3図)しており、古代からの変遷がないとするならば、調査地周辺には郷にはなれない単位の共同体が存在したことが想定される。その中の有力な集落跡は新幹線調査地点で発見された築地遺跡とみてよい。本調査地の南条遺跡は有力集落跡のはずれに位置するか、または母村に対する枝村的性格を有しているともいえる。

中世の遺構として井戸址と西区の小穴群を抽出した。布施高田館跡に関与する遺構であろうと考えている。



IV-1 南区全景(西より)



IV-2 西区全景(北より)



# 浅川扇状地遺跡群 辰巳池遺跡

## —アルピコ建設㈱吉田宅地造成地点—

### 例 言

- 1 本書は、アルピコ建設㈱代表取締役会長瀧澤 徹と長野市長鷲澤正一との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき実施した緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市吉田三丁目1137-7 他に所在する。
- 3 調査は、平成15年6月30日から7月28日に実施し、約500m<sup>2</sup>を調査した。
- 4 遺跡の略号は「AYTP」である。

### 目 次

I 調査の経過	1
1 調査の事務経過	1
2 調査日誌	1
3 調査の体制	2
II 調査地周辺の環境	3
1 地理的環境	3
2 考古学的環境	5
III 調査	7
1 試掘調査	7
2 遺構と遺物	9
(1) 縄文時代の遺物	9
(2) 弥生時代中期の遺構と遺物	9
(3) 古墳時代前期の遺構と遺物	10
(4) 奈良時代の遺構と遺物	12
(5) 平安時代の遺構と遺物	13
IV まとめ	19

## 挿 図 目 次

1 図	調査地位置図.....	3
2 図	調査地周辺の字境図.....	4
3 図	調査地周辺の地形図.....	4
4 図	吉田地区の発掘調査地点図.....	5
5 図	調査対象地(アミ部)・試掘坑位置図.....	7
6 図	遺構分布図 .....	8
7 図	縄文時代の土器拓影図.....	9
8 図	3号土坑実測図.....	9
9 図	3号土坑出土土器実測図.....	10
10 図	6号住居址実測図.....	10
11 図	古墳時代前期の土器実測図・拓影図.....	11
12 図	1号(左)・4号(右)住居址実測図.....	12
13 図	10号住居址実測図 .....	12
14 図	奈良時代の土器実測図.....	13
15 図	平安時代住居址実測図.....	14
16 図	平安時代の土器実測図.....	14
17 図	土坑(1:4)・溝址(1:80)実測図.....	18

# I 調査の経過

## 1 調査の事務経過

平成14年10月10日 セキスイハイム信越（株）より来所にて埋蔵文化財の有無についての照会がある。試掘調査が必要である旨回答する。

11月11日 （株）ワールド建築事務所より電話にて同上の照会があり、同様の回答をする。

12月25日 （株）ワールド建築事務所と試掘調査について協議を実施する。

平成15年2月6日付 アルピコ建設(株)代表取締役社長稲原信明より「埋蔵文化財試掘調査依頼書」、(株)長野コクヨより「土地所有者の承諾書」の提出がある。

2月20日 試掘調査を実施する。

2月24日付 発掘調査等の保護措置が必要な旨を記した「埋蔵文化財確認調査概要報告書」を提出する。

5月21日付 （株）長野コクヨ代表取締役林 信男より文化財保護法57条の3第1項の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」の提出があり、5月30日付で長野県教育委員会教育長宛進達する。

6月19日付 県教委教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。事業主体者変更についての関係書類の再提出は不要とのこと。

6月23日付 「埋蔵文化財発掘調査依頼書」等の提出がある。

6月26日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。

6月30日付 重機等に係わる「賃貸借契約書」を（株）北條組代表取締役北條高己と締結する。

7月7日付 遺構測量等に係わる「業務委託契約書」を（株）写真測図研究所代表取締役杉本幸治と締結する。

7月30日付 「発掘調査終了報告書」「埋蔵文化財の発見について（通知）」を関係機関に提出する。

## 2 調査日誌

6月30日～7月2日 重機による表土除去作業を行う。

7月2日 調査区域内の整備及び遺構検出（南北区）作業を開始する。

7月3日・4日 住居址を主体に形態確認を継続する。

7月8日～9日 SB1～4の調査を実施する。遺構測量を行う。

7月10日 南北調査区の調査を終了し、写真撮影を行う。東西調査区の遺構検出作業を行うも雨水のため状況悪し。

7月11日 遺構検出作業後、SB5の調査を開始する。

7月14日 SD1・2の調査（終了）、SB6の調査を開始する。

7月15日 東西調査区の調査を終了し、写真撮影を行う。西調査区の遺構検出・SD3及び土坑の調査を実施する。

7月16日 東西調査区のSB6・土坑の精査後、写真撮影・遺構測量を行う。西調査区のSB7～9の調査を開始する。

7月17日 昨日の調査を継続し、精査後写真撮影を行う。



I-1 表土除去

7月18日 西調査区に遺構確認のためのグリット・トレンチを設定する。SD4の掘り下げを行う。

7月22日 グリット調査等を継続する。SB10の調査を行う。

7月24日 調査継続後、調査区全景写真撮影を行う。

7月25日 諸遺構の再精査を実施し、写真撮影・遺構測量を行う。

7月28日 遺構測量（遺構図結線）をもって現地における発掘作業を完了する。



I-2 遺構検出

### 3 調査の体制

埋蔵文化財センター組織体制については南条遺跡の項を参照にされたい。この節では発掘調査・整理調査に直接携わった職員及び従事者を記する。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 睦秀
総括責任者	副参事兼埋蔵文化財センター所長	磯野 久夫
庶務担当者	係 長	山岸恒雄（経理・契約事務）
	職 員	吉村久江（庶務事務）
調査担当者	局主幹兼所長補佐	矢口 忠良（報告書編集）
	主 事	風間栄一（調査主任・保護協議）
	主 事	小林和子（保護協議・試掘調査）
	専門員	小野由美子（調査員）

発掘従事者 伊藤八重子・上原律江・後藤一雄・塩入洋子・清水昭光・角田恵子・田中純子・田村香之  
寺島直利・中曽根 伶・宮沢周子・宮下美代子・山口克巳

整理従事者 青木善子・池田寛子・倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・塚田容子・富田景子  
西尾千枝・武藤信子・村松正子・矢口栄子

遺構測量等委託 （株）写真測図研究所代表取締役杉本幸治

発掘調査の実施にあたり、アルピコ建設(株)開発事業統括松井 一・北條組土木第一課長宮尾延雄の各氏にはなにかとご協力をいただいた。感謝申し上げます。

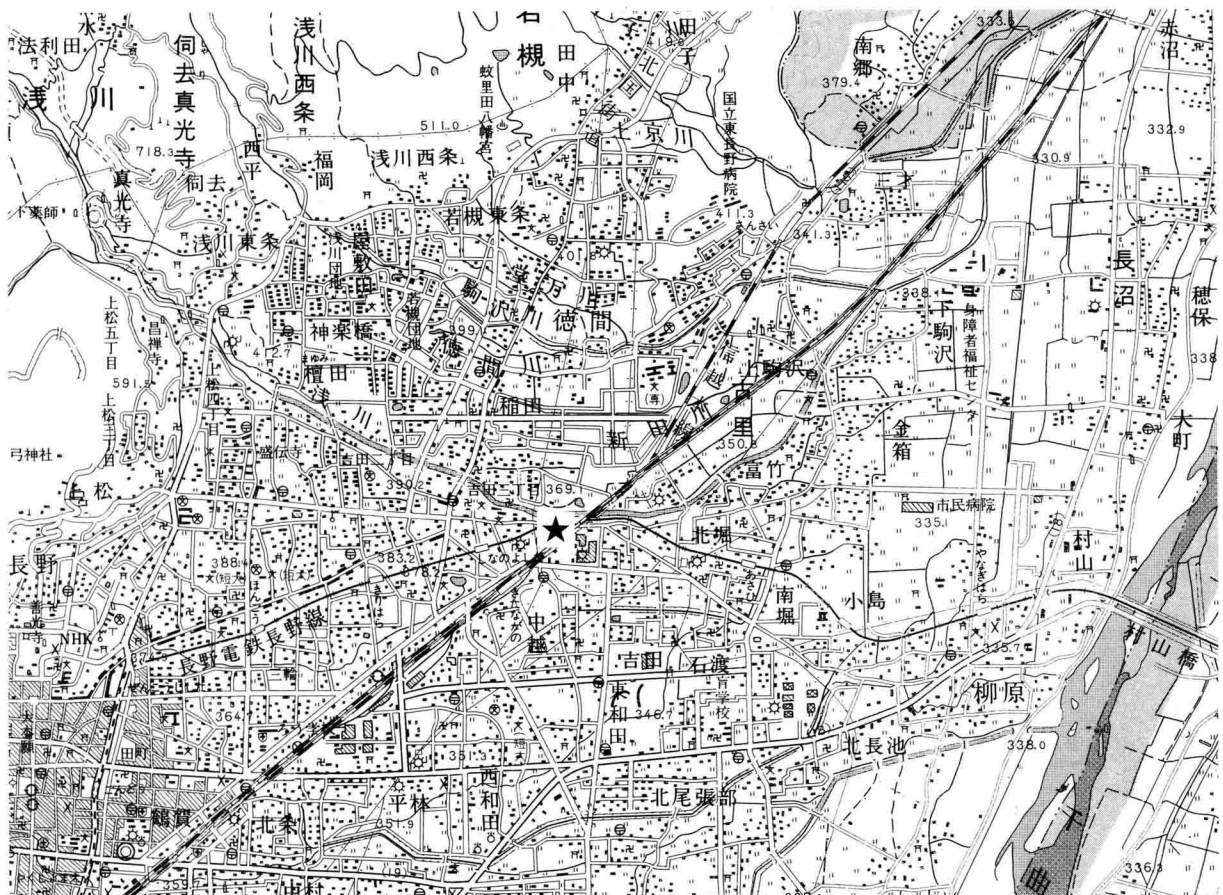


I-3 西区の調査

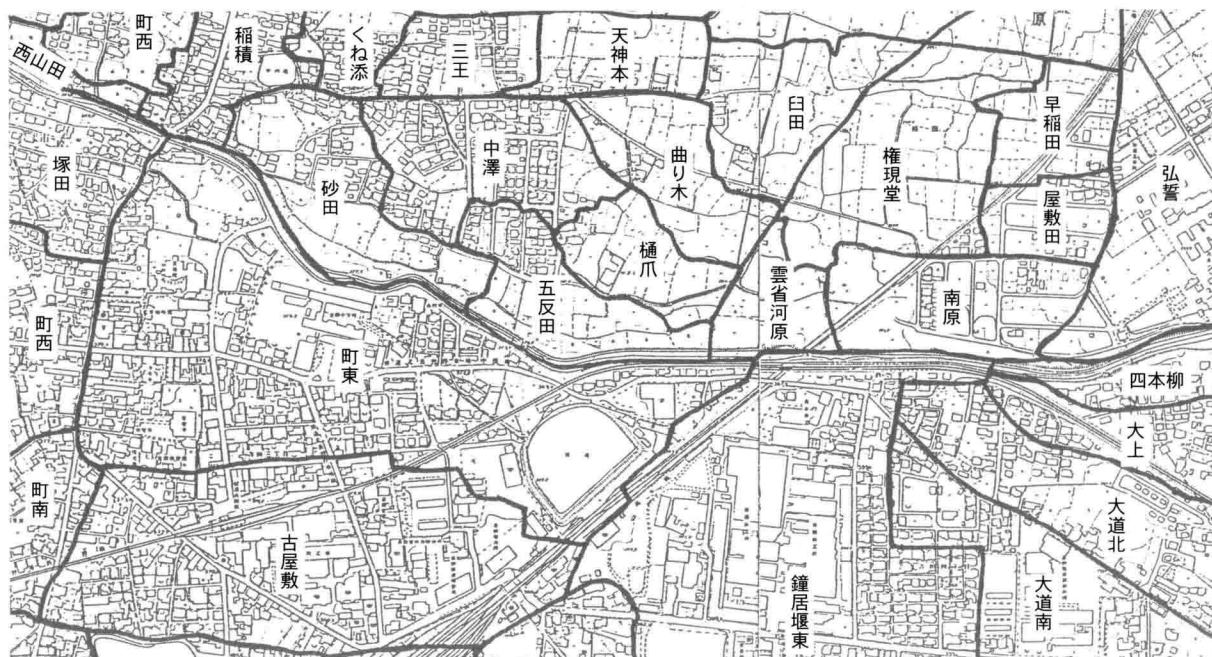
## Ⅱ 調査地周辺の環境

### 1 地理的環境

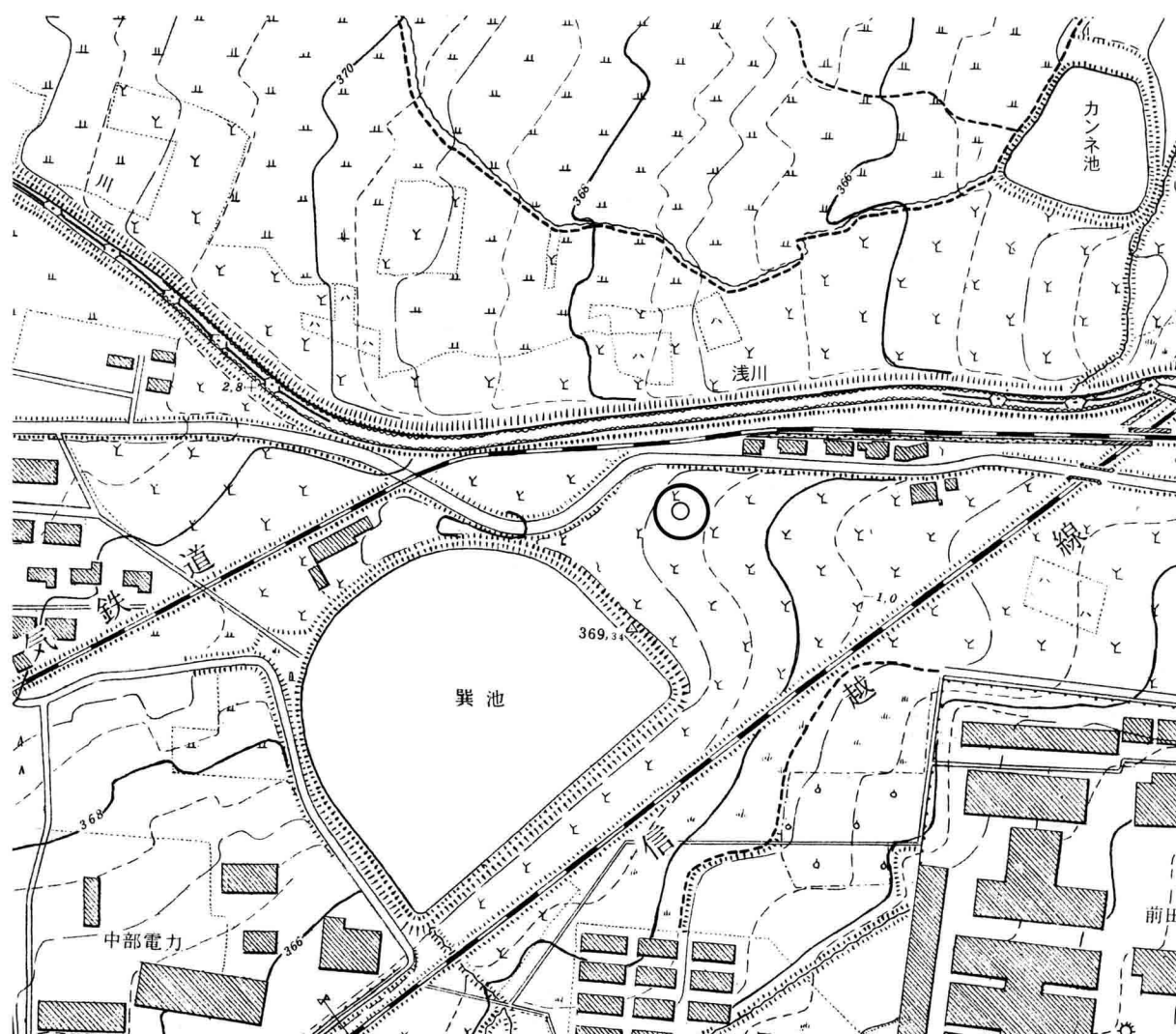
長野市の最高地点飯縄山（1917.4m）を水源とする浅川は、山間地を浸食しながら流下し、真光寺の通称「浅川原口」を扇頂部にして広大な扇状地を形成する（1図）。流路を南東に向けていた浅川は、その後千曲川と犀川の影響を受けて調査地より下流の北堀地籍付近から北東へ向きを変えて流下し千曲川に合流する。ことほどさように調査地は浅川扇状地の扇端部付近に位置する。また、吉田小学校西の他力橋あたりから浅川は天井川となり、J R信越線と交差する部分では線路の上を長野電鉄線と共に高架となる。当然調査地は浅川に対峙している位置にあり、天井川をみることになる。しかし、天井川化したのはそう古いこととは思えず、字境図（2図）を瞥見すると上流から西山田・砂田・五反田・雲雀河原・南原の字名が浅川の流路に添ってみられ、字面積も下流にいくに従い拡大し河川敷化していることが読みとれる。更に下流域の弘誓・四本柳・大上等の字名地籍は扇状地状に八方に広がっている点が注目される。すなわち字名が確立する以前の扇状地内の浅川は上流では谷地形で、下部中流域では河川地形に、下流では乱流地形を呈していたものと推測する。このうち調査地は河川地形の右岸肩部に位置する点遺跡の在り方を考える上で重要な要素になる。また、大正15年測量・昭和27年修正図（3図）をみると、調査地は標高367m付近に位置し、地目は桑畑であるものの窪地化した地形上にあることにも注意され、遺跡の規模を規制しているものと思われる。



1図 調査地位置図（1：50,000）



2 図 調査地周辺の字境図 (1 : 20,000)



3 図 調査地周辺の地形図 (1 : 30,000、大正15年測量・昭和27年修正)



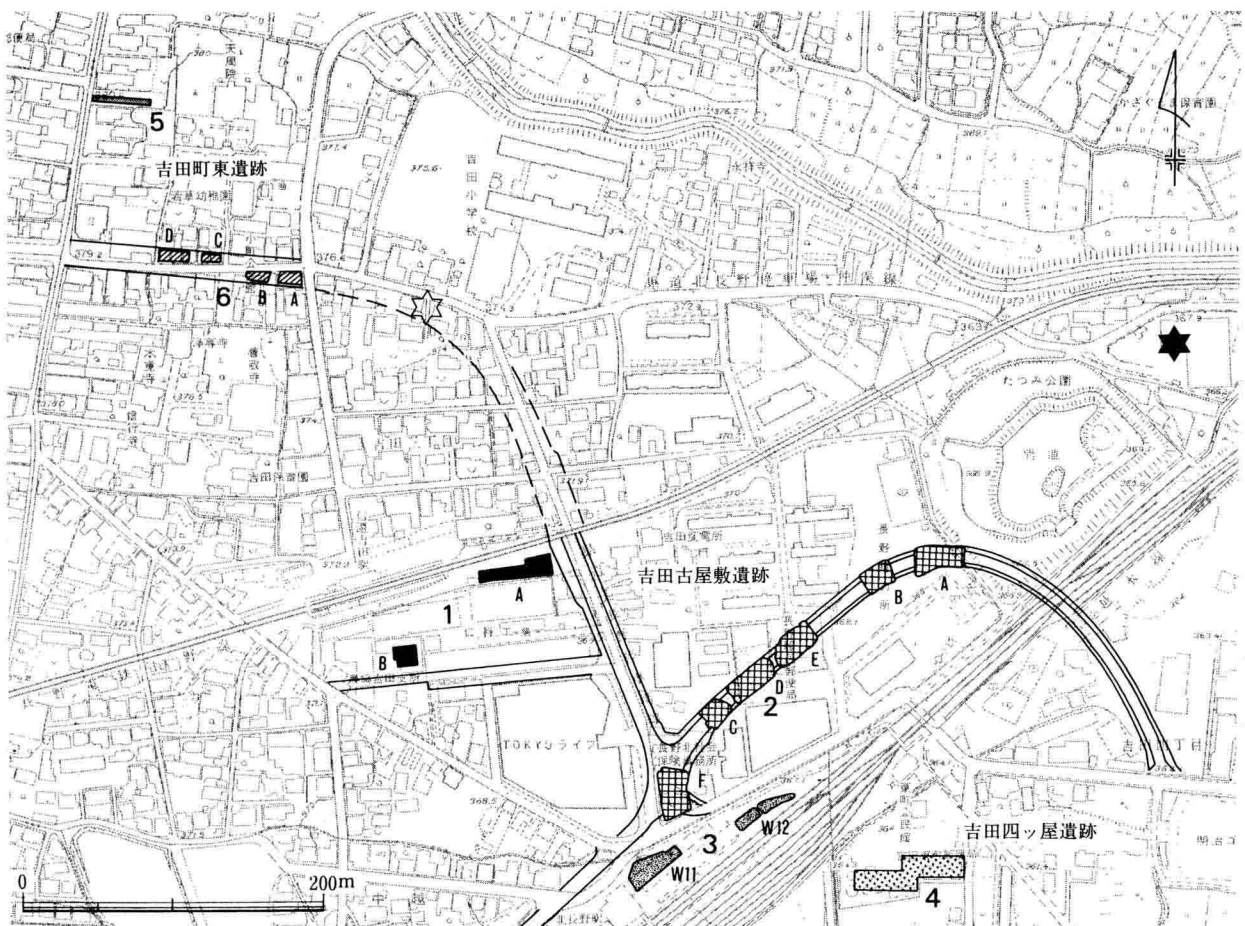
## 2 考古学的環境

吉田地域は早くから開発の波がおしよせ、宅地化や各種の事業所の建設が進み、埋蔵文化財包蔵の様子が不明の点が多かった。ところが近年再開発による新たな展開をみせ、地点的ではあるが徐々に遺跡の存在や内容等が明らかになりつつある（4図）。近年刊行された『吉田古屋敷遺跡』から転記又は参照にして記載する。

### 1 吉田古屋敷遺跡—北長野駅前B—1地区市街地再開発事業地点—

平成7年度に標記事業に伴い約750㎡を発掘調査した。調査区は旧建築物等の関係から2区に分かれA区からは、縄文時代後期前葉の敷石住居址1軒・同中葉の集石土坑1基・同小期不明の溝址2条、弥生時代中期環状溝址1基・同後期木棺墓1基、中世溝址1条及び多数の土坑・小穴を確認している。縄文時代後期の敷石住居址は長野市において初見である。B区は遺構面が2面あり、上面からは弥生時代中期住居址2軒・同後期住居址1軒、古墳時代後期住居址5軒、奈良時代住居址1軒等の遺構を検出した。特記遺物に銅製丸柄が出土している。下面は縄文時代の遺構で、環列土坑群1基の他多数の性格不明の土坑・小穴を調査した。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群吉田古屋敷遺跡』平成9年



- |                   |                   |                    |
|-------------------|-------------------|--------------------|
| 1. 吉田古屋敷遺跡（B—1地点） | 2. 吉田古屋敷遺跡（踏切地点）  | 3. 浅川扇状地遺跡群（新幹線地点） |
| 4. 吉田四ツ屋遺跡        | 5. 吉田町東遺跡（宅地分譲地点） | 6. 吉田町東遺跡（北長野通り地点） |
- 黒星：調査地 白星：北長野通り地点調査継続中

4図 吉田地区の発掘調査地点図（1：5,000）『吉田古屋敷遺跡』より転載）

## 2 吉田古屋敷遺跡（2）—吉田踏切除去事業地点—

市道吉田朝陽線道路改良事業に伴い平成7～11年度に約2,500㎡を発掘調査した。平成7年度の調査での特記として縄文時代後期土坑1基、弥生時代後期の環濠とみられる最大幅約1.2m・最深部約1mの大溝を確認した。覆土からは北陸系土器を多く含む多量の土器が出土している。8年度では弥生時代後期の木棺墓がある。棺材の小口痕が明瞭に残り、ガラス製丸玉12個・同小玉3個が出土した。9年度では縄文時代中期後半の柄鏡形敷石住居址を含む住居址3軒・土坑10基・溝址1条等と弥生時代後期住居址1軒を検出した。10年度では弥生時代後期の住居址1軒と一辺8m代の古墳時代前期に比定され、陸橋を有する方形周溝墓を確認している。11年度では縄文時代住居址1軒、弥生時代中期住居址1軒・同後期住居址4軒、古墳時代前期住居址1軒及び弥生時代後期壺棺墓1基等を検出した。これまでの調査成果を概略すると縄文時代には比較的大きな範囲に遺構が展開するものと思われる。弥生時代以降は小集落が形成され、墓域にも利用された地域ともいえる。

長野市埋蔵文化財センター『所報NO7～11』平成8～12

## 3 浅川扇状地遺跡群—北陸新幹線建設地点—

平成5年度から（財）長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施された。本調査地に関与するJ R北長野駅周辺（W11・12区）からは縄文時代中期後半の加曽利E系の埋甕が数個検出され、屋外埋甕が想定されている。この他に弥生時代後期の合口壺棺墓も出土している。

（財）長野県埋蔵文化財センター他『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5』平成10年

## 4 吉田四ツ屋遺跡

平成7年度に民間共同住宅建設に先立って、J R北長野駅南側で発掘調査を実施した。縄文時代後期住居址2軒、弥生時代中期住居址4軒・同後期住居址2軒・土器棺墓1基、古墳時代前期住居址2軒・墳丘墓2基、平安時代住居址6軒・溝址5条の他多数の土坑や小穴を検出した。土器棺墓からはガラス小玉・管玉が出土している。墳丘墓は前方後方形の溝が巡るものと推定される。もう一つの墳丘墓からは壺形埴輪が出土している。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡（6） 藁河原遺跡』平成8年

## 5 吉田町東遺跡—民間宅地造成地点—

平成6年度に実施した発掘調査で、弥生時代後期住居址2軒、同後期末から古墳時代初頭の大溝址2条、平安時代住居址1軒を確認した。大溝は同一遺構と考えられ一辺14mの方形区画を呈するものと思われる。検出面や攪乱層から縄文時代中期の土器片が多量に出土しており、近隣に遺構の存在が予想される。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡（2）・町東遺跡』平成7年

## 6 吉田町東遺跡（2）—北長野通り道路改良地点—

平成6年度から緊急地方道道路整備事業に伴う発掘調査を断続的に続けている。平成6年度では弥生時代後期住居址1軒、古墳時代後期から奈良時代住居址3軒の他河川跡・溝址・土坑等を検出した。14年度の調査では約1,000㎡を発掘し、弥生時代から平安時代にかけての住居址22軒・井戸址3基・溝址6条の他浅川の旧流路を確認した。住居址の年代主体は古墳時代後期にあり、カマド構築材や住居廃絶後のカマド破壊行為の痕跡が明瞭に残っているものが半数以上にのぼるものと思われる。平安時代の住居址は調査地の東側に集中して存在する。

長野市埋蔵文化財センター『所報NO6・14』平成7・15

この他に吉田地域には弥生時代後期前半「吉田式土器」の標式遺跡の吉田高校グラウンド遺跡があるが、今回の調査成果に影響がないので割愛する。また、辰巳池遺跡の対岸には稲田南遺跡がある。この遺跡は平成10年度から12年度にかけて、稲田南土地区画整理事業に伴い約23,500㎡を発掘調査し、弥生時代中期から中世に至る多数の遺構・遺物が確認されている。詳細については本年度刊行予定の発掘調査報告書を参照されたい。



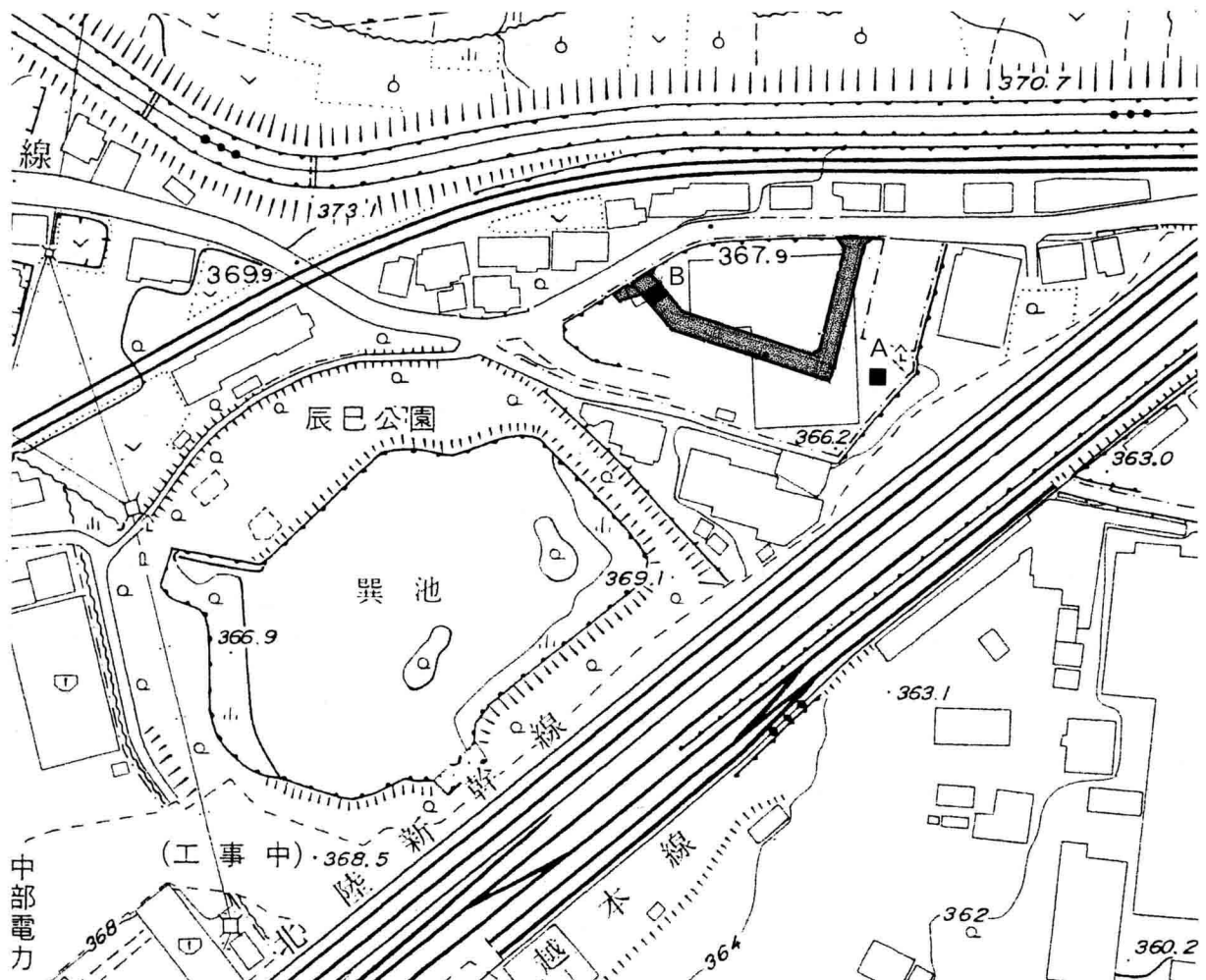
### Ⅲ 調 査

保護対象地は、遺構の破壊が懸念される宅地造成計画地の内道路敷部と浄化槽建設地に限定される。そのため調査地はL字形を呈する規模の大きいトレンチ的な性格を有している（5図）。調査の進行上南北方向調査区を南北区、東西のものを東西区、西端の調査地を西区と呼称している。遺構の分布は、南北区では既存の建物により破壊を受けているものが多く全容不明のものの住居址3軒と小穴が確認され、東西区では住居址2軒と2条の溝址を検出したが無遺構空間が目立つ。西区では遺構面が二面あり、上面から住居址1軒と溝址1条及び小穴を、下面からは住居址4軒・溝址・土坑等をそれぞれ確認した。住居址の分布を単純にみると、L字形の屈曲部西区周辺に集中ヶ所が窺える。時代的には平安時代でのことであって、他の時期のものは散在的な在り方を示している（6図）。

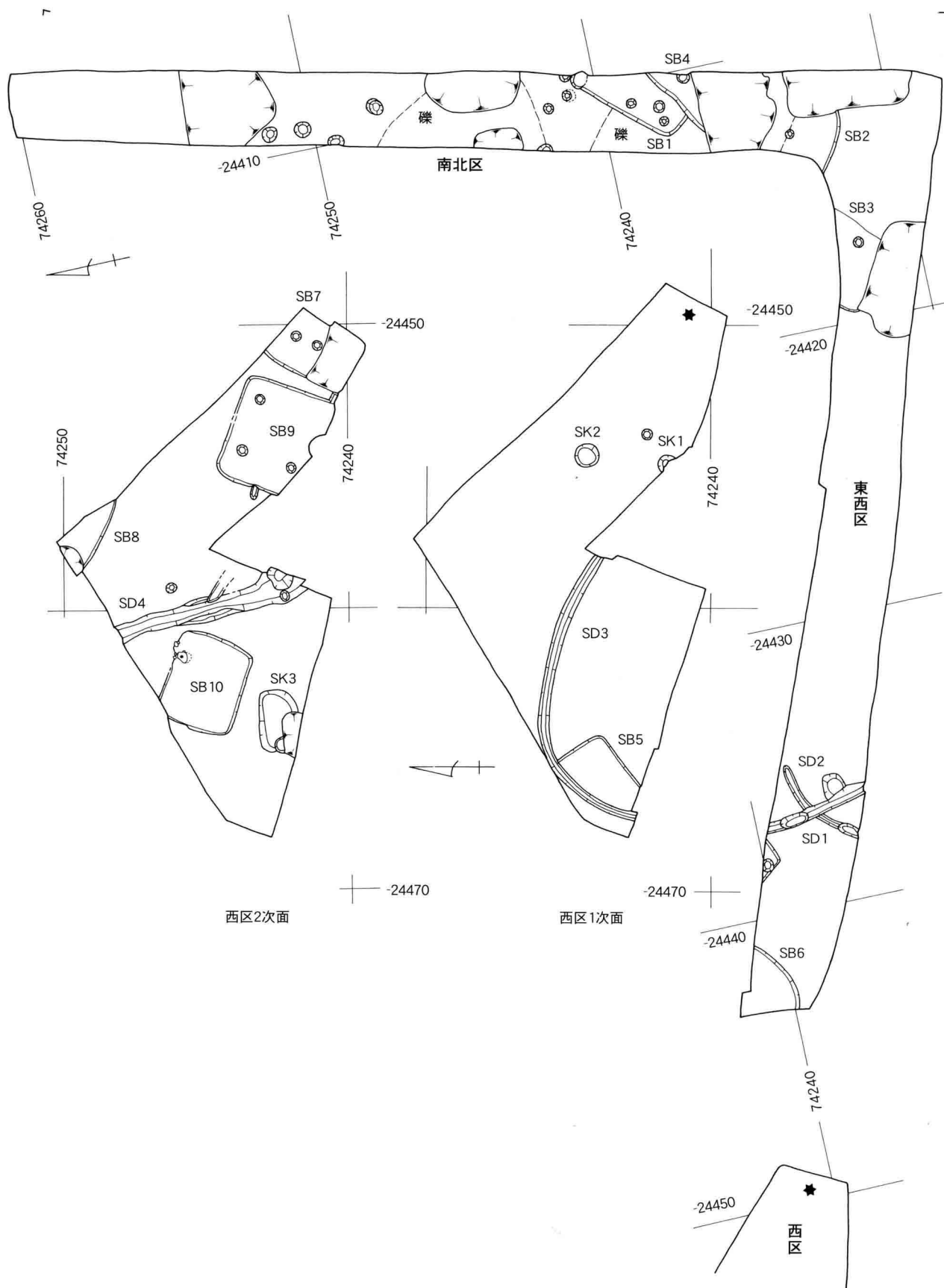
#### 1 試掘調査

調 査 日 平成15年2月20日

調査の目的 開発事業予定地は周囲の地形状況等から埋蔵文化財包蔵の可能性があり、包蔵状況によっては破



5図 調査対象地（アミ部）・試掘坑位置図（1：2,000）



6 図 遺構分布図 (1 : 200)

壊の及ぶ可能性も考えられる。したがって施工に先立ち事業予定地内を試掘し、埋蔵文化財包蔵状況を把握する。

**調査の方法** 任意の地点に試掘坑（L 2 m×W 2 m）を2ヶ所設定（5図）し、坑内断面土層の観察等により、遺構・遺物包含層の有無及び深さを確認する。

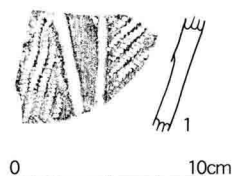
**調査結果** A地点では現地地表下135cmまで盛土され、145cmで5 cm程の薄い暗褐色を呈する遺物包含層を確認する。その下層は黄褐色粘質土（基盤層）となる。B地点では-70cmで遺物包含層に、-140cmで基盤層に至る。基盤層がA・B地点共に一定ならば、遺物包含層は東に移行するに従って堆積を減少していることから遺構の存在もこの傾向にあるものと思料される。

以上の結果から当該地における埋蔵文化財包蔵の可能性は高く、発掘調査等の保護措置が必要である。

## 2 遺構と遺物

### (1) 縄文時代の遺物

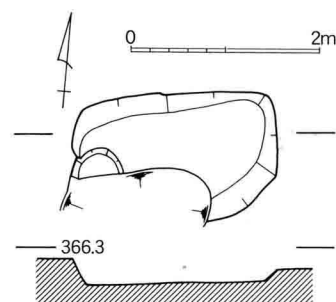
西区の遺構検出面から縄文時代中期後半の加曽利E式期深鉢体部片が1点出土している（7図）。縄文地に垂下する2本の沈線文が施され、沈線文間は無文になる。裏面の一部は剥離している。



7図 縄文時代の土器  
拓影図（1：4）

### (2) 弥生時代中期の遺構と遺物

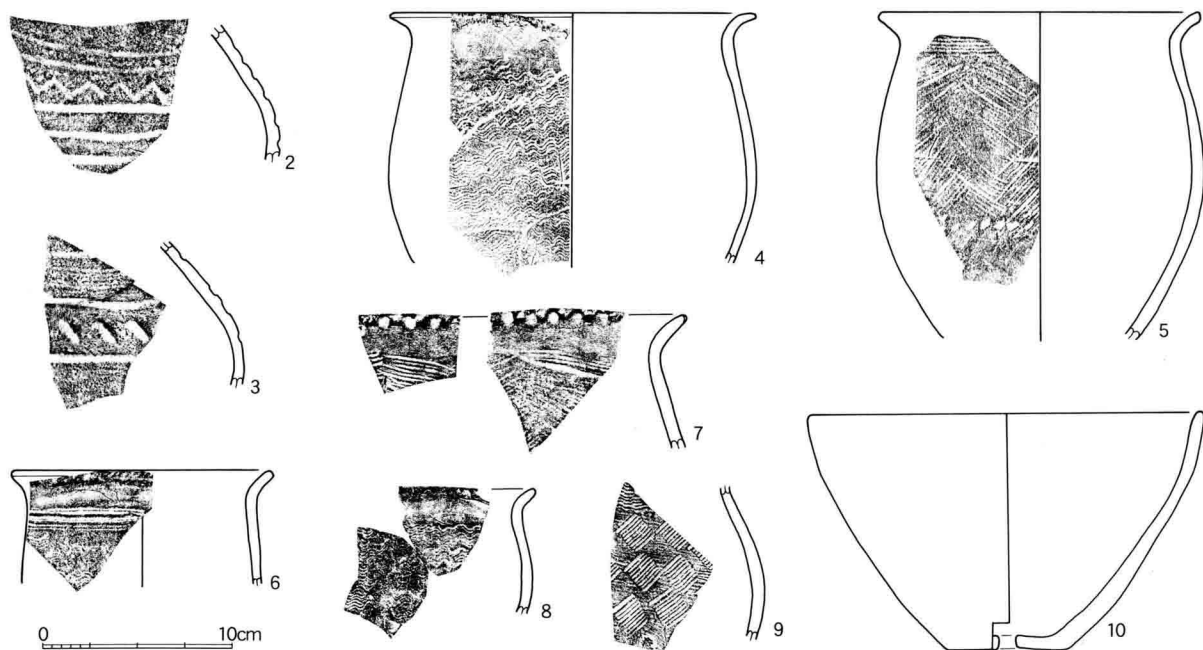
**3号土坑（8図）** 西区の西端に位置し、南側の一部は後世の攪乱により破壊を受ける。形態は不整隅丸長方形を呈し、長軸方向はほぼ東西を指す。規模は長軸2.2m・南北1.35m・掘り込みの深さ28cmを測る。底面は平坦で軟弱であり、小型の居住施設とも考えたが柱穴・焼土等が確認されない。西端に直径45cm・深さ6cmの円形土坑を内包するが、当遺構と関係は不明である。土器の出土状態は遺構中央付近の底面直上からのものが多く、破片での出土であった。遺構廃絶後に投棄された可能性が高い。



8図 3号土坑実測図（1：80）



Ⅲ-1 3号土坑



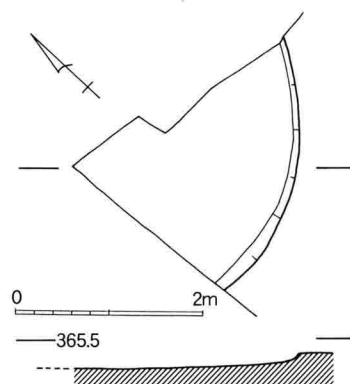
9図 3号土坑出土土器実測図・拓影図（1：4）

**遺物（9図）** 出土量は今回調査した遺構の中では多い方であるが、残存器形はすべて3分の1以下である。また、焼成温度によるものか9を除き器面の磨耗が著しく調整の観察は難しい。器種には壺(2・3)・甕(4～9)・甑(10)がある。壺は体部最大径の部位で、数条の平行沈線文間に2には山形文、3には櫛歯による刺突文が施される。甕の器形は砲弾形を呈し、最大径が口縁部もしくは体部中位にあり、その数値幅はミリの単位内である。文様は口唇部に縄文(6)・縄文地に指頭押引文、頸部に櫛描平行線文(5・6)、頸部下から体部下半にかけて櫛描波状文(4・6・8)・斜行羽状文(5・7)が施される。5の最下部文様は棒状工具による連続刺突文である。9は特異な施文となり、頸部に波状文が、下位の体部には市松文様形に櫛描斜行短線文がみられる。これらの内部調整はヘラナデとナデを基調としているものと看取される。甑は体部が大きく外開する鉢形を呈し、底部に円孔が穿たれる。口径21.0cm・底径6.6cm・器高12.6cmの法量である。

### (3) 古墳時代前期の遺構と遺物

**6号住居址(10図)** 東西区の西端に位置し、調査では遺構の南東隅部を露呈したにすぎない。床面は拳大から人頭大の河原石が浮き出ており、柱穴や焼土等が認められないことから居住施設でない可能性もある。しかし、覆土が黒褐色砂質土で人為的な掘り込みであることは間違いない。形態は壁の湾曲状態から隅丸形のものを想定する。遺構の規模等の法量は不明であるが、掘り込みの深さは15cmを測る。

**遺物(11図11～13)** 図上復元可能な土器片は、甕(11)・蓋(12)・器台(13)の3個体が出土しているにすぎない。甕は肩部が張り、口縁部が大きく外反する器形になる。文様は頸部に櫛描平行線文、口縁部以下に波状文が施される。内面調整はハケナデのちナデによっている。器台は脚部に3個ないし4個の円孔が穿たれる。調整は外面がヘラミガキ、内面裾部には横ヘラケズリがみられる。

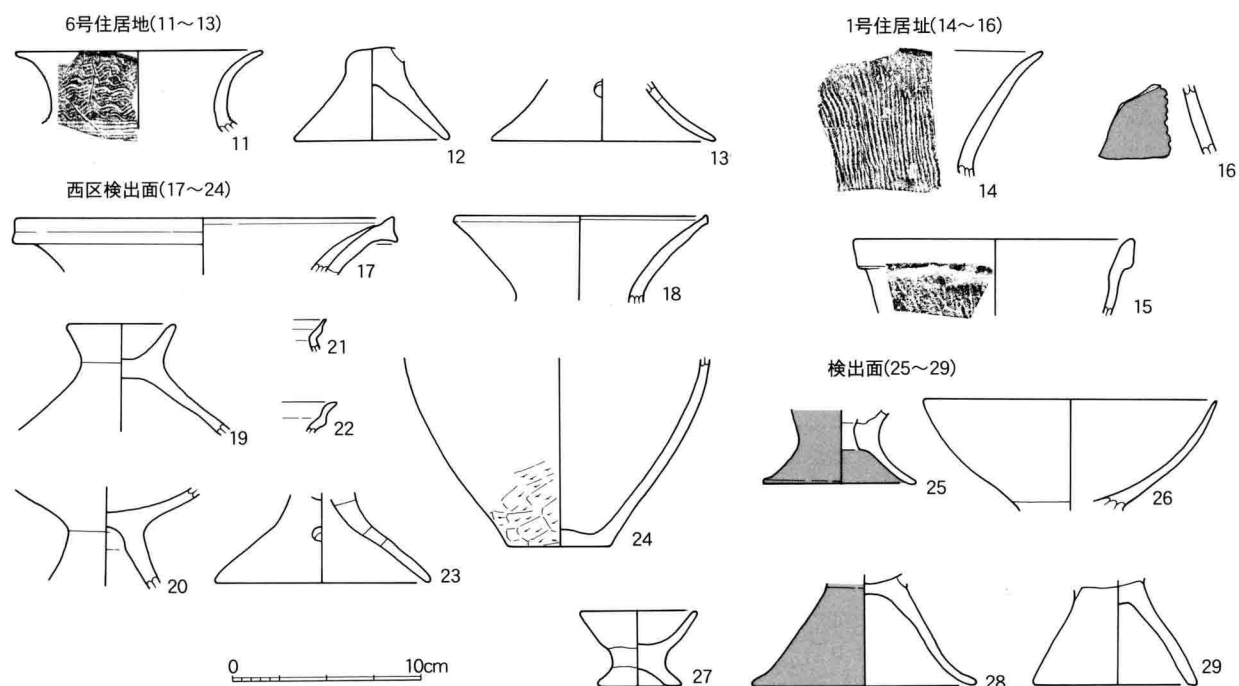


10図 6号住居址実測図（1：80）

**包含層・検出面出土の遺物（11図14～29）** 14～15は1号住居址の覆土から出土したもので、14は壺の口縁部・16は高坏脚部で15は鉢と推定する。14の文様は全面に上から下へ櫛描条線文が施される。15の口縁部は粘土貼付により有段になり、体部には14と同様の条線文がみられる。16の外面は赤色塗彩され、焼成後小円孔が縦列に穿たれる。17～24は西区西端の10号住居址検出中に出土した土器で、一括資料と考えられる。器種には壺（17・18）・蓋（19）・高坏（20）・器台（23）・甕（24）がある。21・22はS字状口縁土器の系譜を引く小型甕と推定する。総体に器面のアレが目立つ。17の口縁部は帯状の有段口縁で、内面に粘土の再貼付成形が認められる。18の口唇部は面取りされる。24の体部下半はヘラケズリが施され、底部付近にその痕跡が明瞭に残る。25・26は南北区からのもので、器台脚部と高坏坏部の破片である。器台は脚部内面まで赤色塗彩が施される。27～29は西区の検出面から出土したもので、27はミニチュア土器・28は高坏で29は台付甕の台部であろう。



Ⅲ-2 6号住居址



11図 古墳時代前期の土器実測図・拓影図（1：4）

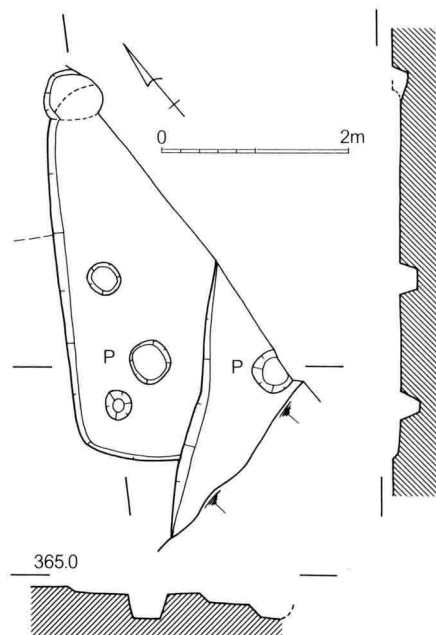
#### (4) 奈良時代の遺構と遺物

**1号住居址 (12図)** 南北区に位置し、調査では西側の一部を露呈したにすぎない。また、東側は4号住居址に切られ、北西隅で円形土坑と重複関係にある。形態は長方形を呈し、西壁の規模を4m前後と推定する。検出面からの掘り込みは浅く11cmを測る。床面は平坦であるが拳大の円礫が浮き出す。柱穴は住居址内に3個、4号住居址内に1個確認され、このうち東側の2個が支柱穴であろう。カマドは確認されない。

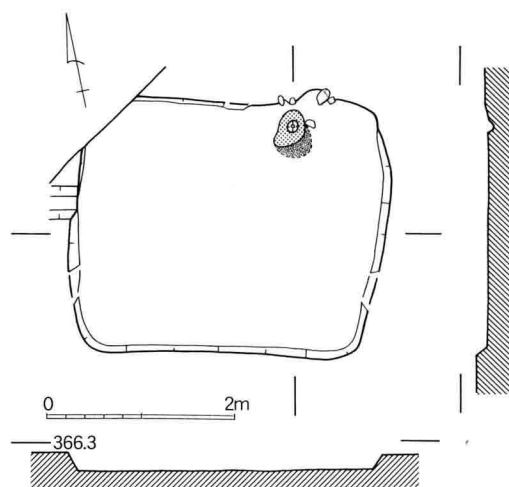
**遺物 (14図30・31)** 図上復元可能な土器片は、甕2個体にすぎない。共に最大径が口縁部にあり、体部が直線的もしくは内傾気味である。口縁部は短く外反する特色がある。外面の調整は下から上へヘラケズリが施され、内面はヘラナデで仕上げている。

**10号住居址 (13図)** 西区の西端に位置し、北西隅部を除きほぼ全形を検出した。形態は東西軸が長い長方形を呈し、長軸3.4m・主軸2.7m・深さ20cmの規模になる。主軸方向はN13°Eを指す。カマドは北壁右寄りに構築されるが、焼土塊化した火床と構築石材が残存していたにすぎない。床面は平坦であるがそれほど堅緻なものではない。ただし、該期の住居址としてはカマドが中央より偏って構築されていること、柱穴が確認されないことなど問題が残る。

**遺物 (14図32～35)** 出土量は少ない。器種には須恵器坏(32・33)と土師器甕(34・35)がある。坏は焼成が悪く白～黄褐色呈し、ロクロ調整痕が目立つ。ロクロからの切り離しは非回転ヘラ切り、所謂ヘラオコシによっており、底部は丸味を帯びている。甕は1号住居址のものと器形及び調整等は同様である。



12図 1号(左)・4号(右)住居址実測図 (1:80)



13図 10号住居址実測図 (1:80)

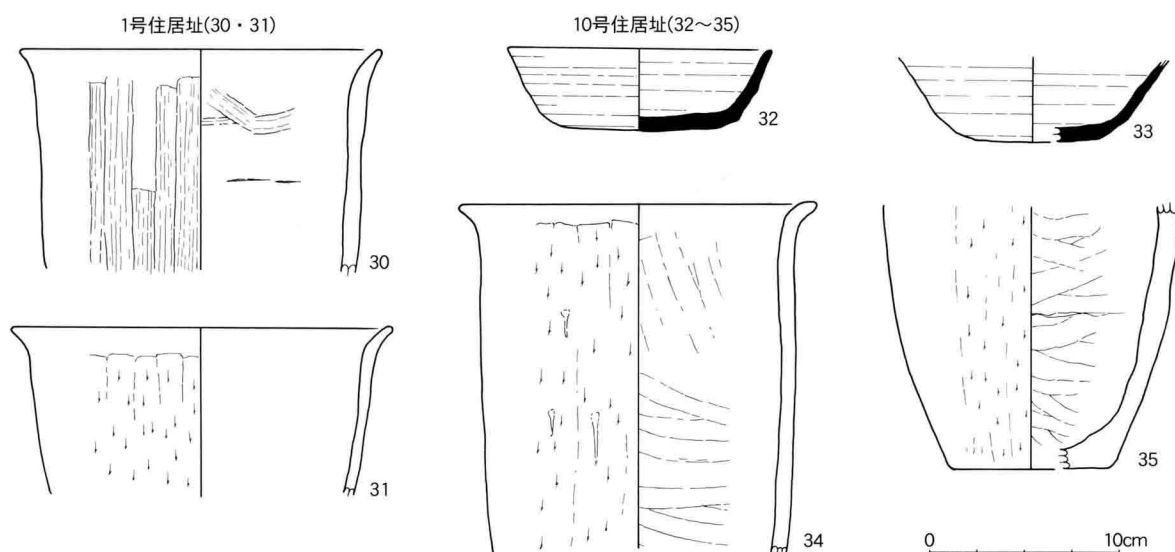


Ⅲ-3 1号(下)・4号(上)住居址





Ⅲ-4 10号住居址・4号溝址



14図 奈良時代の土器実測図（1：4）

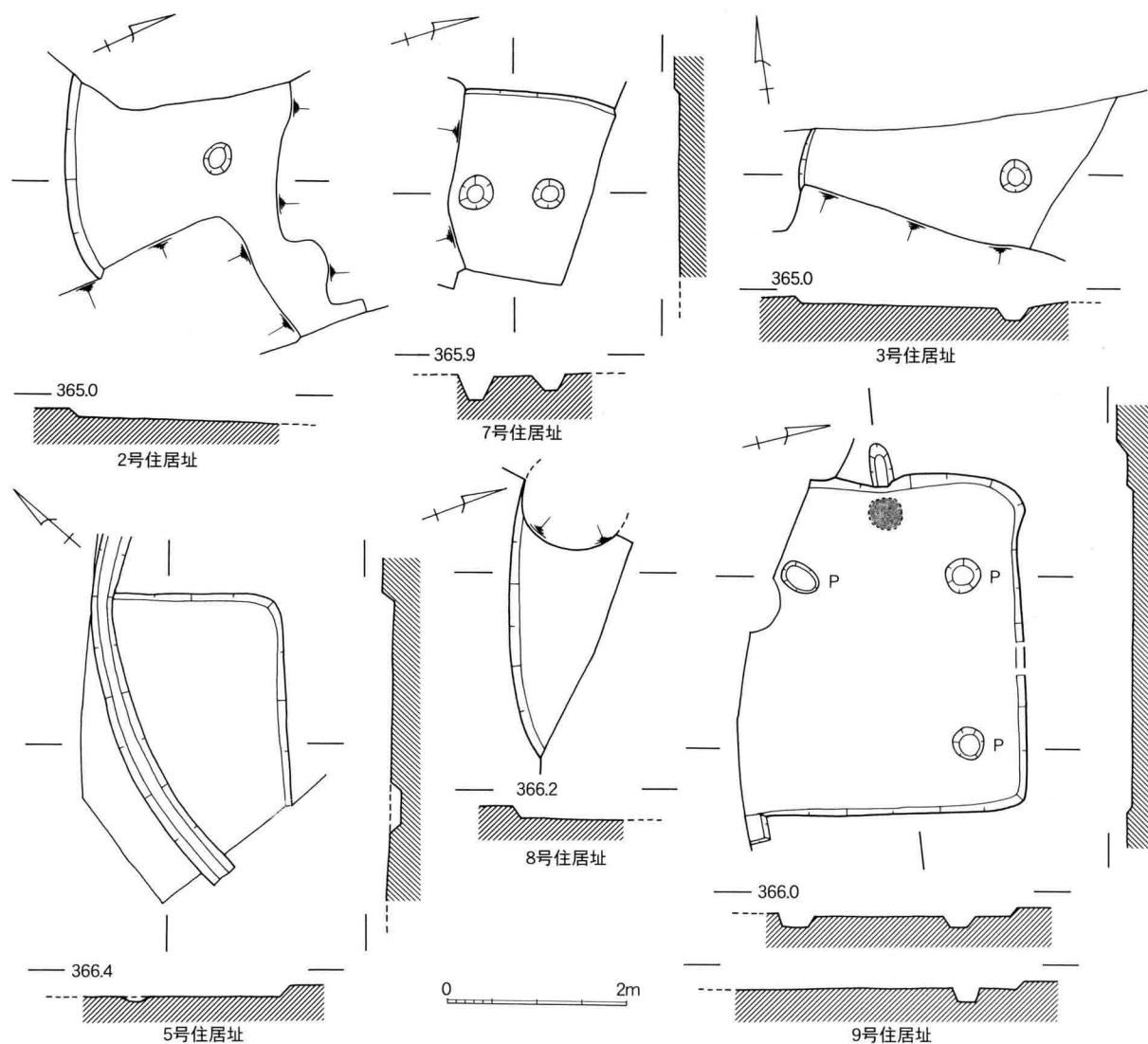
## (5) 平安時代の遺構と遺物

**2号住居址（15図）** 南北区の南端に位置し、北・東壁付近は攪乱を受け、西壁は調査区外に延びる。露呈した部分から形態を推定すると隅丸方形になる。壁高が9cmを測るほか、規模に関する情報は無い。床面は平坦であるが、円礫が浮き出している。

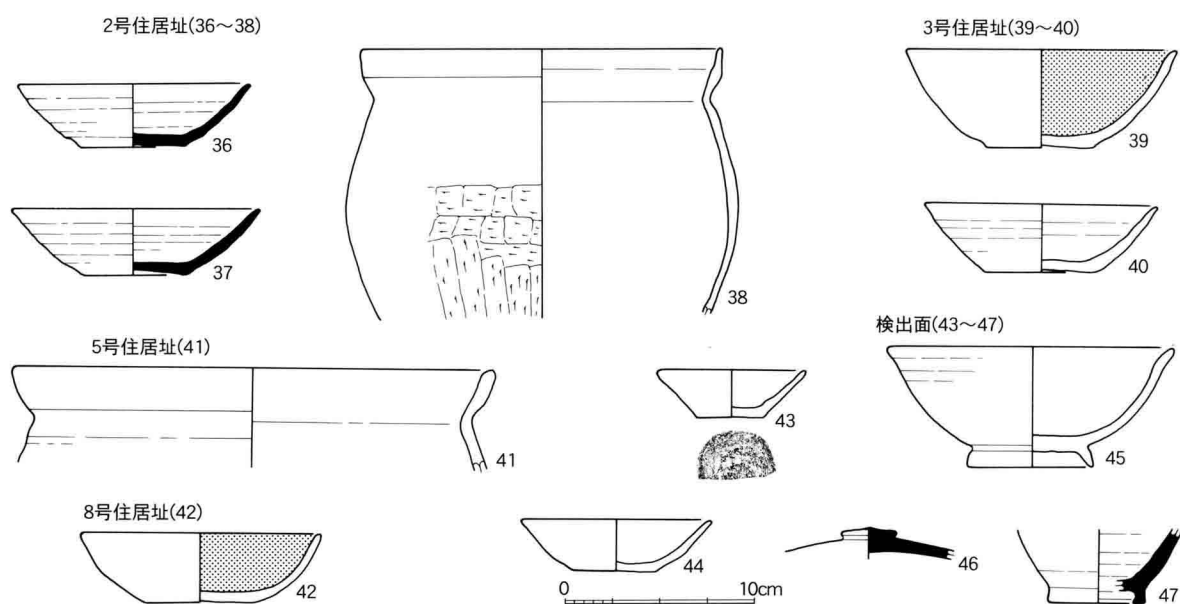
**遺物（16図36～38）** 図上復元可能なものは、須恵器坏(36・37)・土師器甕(39)の3個体あるにすぎない。須恵器は軟質なもの、底部に糸切り痕を残す。甕は口縁部が有段形になり、体部は球形状を呈する。調整はロクロによっているが、体部外面下半は上から下へ横位と縦位のヘラケズリを施し、器壁を薄く整えている。

**3号住居址（15図）** 2号住居址に隣接する。南壁は攪乱により破壊され、北側半分程が調査区外に延びているため全容を知り得ない。東西2.85m・壁高10cmの規模になる。床面は東に傾斜し、南北区の遺構と同様に円礫の浮き出しがある。東壁側に小穴が認められた他に施設に係わるものは確認されない。

**遺物（16図39・40）** 図上復元可能な破片は黒色土器坏(39)・須恵器坏(40)の2個体にすぎない。39の内面は



15図 平安時代住居址実測図 (1:80)



16図 平安時代の土器実測図 (1:4)



ヘラミガキが施され黒色処理される。40は軟質で白灰色を呈する。両者共にロクロからの切離は糸切りである。

**4号住居址 (12図)** 南北区の1号住居址の東側を切り込んでいる。調査では西壁の一部を確認したのみで、形態・規模等は不明である。床面の状況は1号住居址と同様である。小穴が1個確認されているが、配置から1号住居址の主柱穴と考えられる。

**5号住居址 (15図)** 西区の1次面から確認された唯一の住居址であり、3号溝址と重複関係にある。調査では北東の一部分を露呈したにすぎなく、他は調査区域外に延びている。そのため壁高18cmを測る以外他の規模は不明である。床面は平坦であるが堅緻なものではない。焼土・柱穴等は確認されない。

**遺物 (16図41)** 出土量は少なく、すべて破片である。器種には土師器碗・甕(41)がある。甕は口縁部が肥厚するタイプのもので、ロクロにより調整される。

**7号住居址 (15図)** 西区の東端に位置する。調査では攪乱と遺構が調査区域外に延びているため全容を露呈できなかった。形態・規模等は不明であるが、壁高8cmを測る。床面は平坦で軟弱である。遺構中央に小穴が2個確認されたが配置からして主柱穴にはならない。

**8号住居址 (15図)** 遺構は調査区域外に延びているため南壁の一部分を検出したにすぎない。形態・規模等は不明であるが、掘り込みの深さは15cmである。

**遺物 (16図42)** 図上復元可能な土器片は黒色土器坏が1個体あるにすぎない。内面はヘラミガキが施され黒色処理される。底部外面の調整は回転ヘラケズリである。

**9号住居址 (15図)** 西区に位置し、調査区域外に延びる南壁部を除きほぼ全容を検出した。形態は方形を呈するものと思われ、東西の規模は3.75mになる。検出面からの掘り込みは北壁で最も深く22cmを測る。主軸方向はN76°Wである。カマドは西壁の中央付近に構築されるが、調査時には破壊され50cm程突出する煙道と火床が残存するのみであった。床面は平坦で軟弱であり、南側には円礫の浮き出しが目立つ。主柱穴と思われる小穴が方形配列に3個検出したが、南西に位置するものは確認されない。

**土坑 (17図)** 1号・2号土坑共に西区の1次面からの検出である。1号土坑は東半分を検出した。上面形態



Ⅲ-5 2号住居址



Ⅲ-6 3号住居址



Ⅲ-7 5号住居址・3号溝址



Ⅲ-8 8号住居址



Ⅲ－9 9号住居址

は円形で、断面はU字形を呈する。直径0.65m・深さ45cmの規模である。2号土坑は楕円形で、長軸0.9m・東西軸0.8m・深さ10cmを測る。

**溝址（17図）** 1号・2号溝址は東西区に位置し、X状に交差する幅30～35cm・深さ10～20cm程の規模である。3号溝址は西区の1次面に展開し、5号住居址を切り込み湾曲しながら調査区域外に延びている。幅30cm・深さ10～20cm程の溝である。4号溝址は西区の2次面から検出され、南北方向に掘られたU字溝である。幅50～90cm・深さ20～30cmの規模である。

**検出面の遺物（16図43～47）** 図示したものはすべて西区から採集したもので、2分の1以下の残存率の破片である。器種には土師器坏(43・44)・椀(45)、須恵器蓋(46)・小型壺(47)がある。

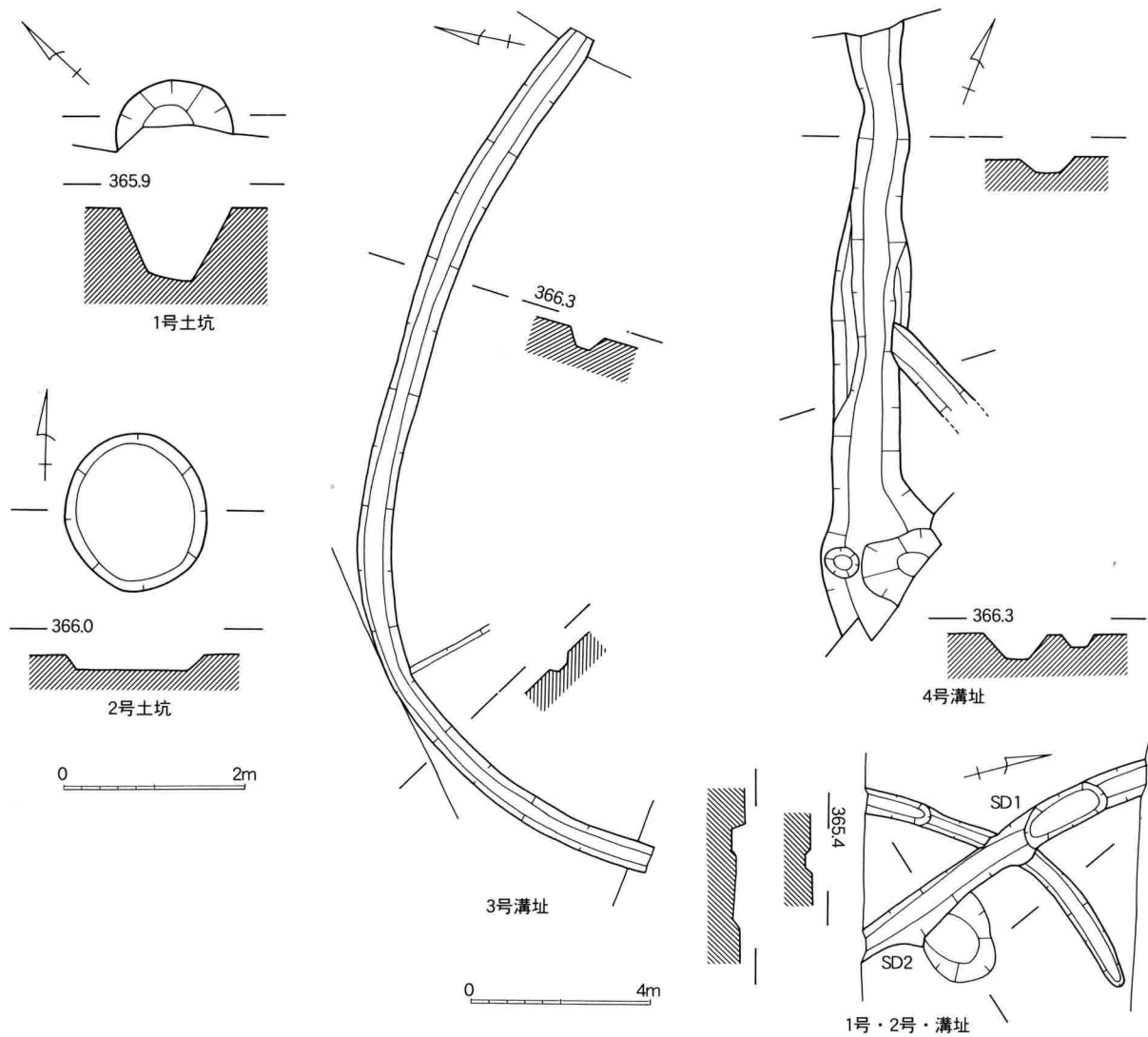


Ⅲ－10 4号溝址





Ⅲ-11 1号・2号溝址

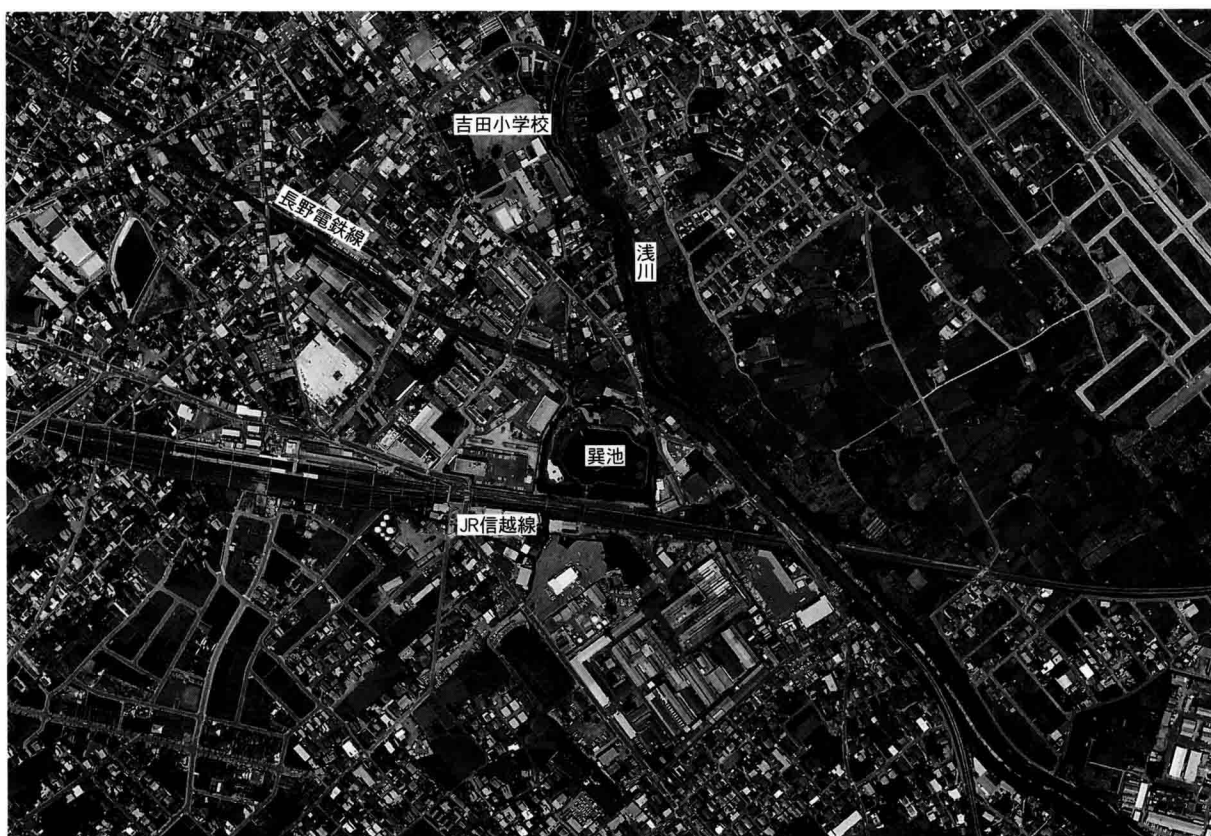


17図 土坑 (1:4)・溝址 (1:80) 実測図

## IV ま と め

僅かな狭長な調査地であり、遺構のほとんどが調査区域外にあるなどして遺跡全体の性格や内容等は把握できたとはいえないが、その一部分を垣間見ることができた。居住遺構の分布をみると西区に集中して確認され、浅川の縁辺に添って小集落が形成されていたものと考えられる。しかし、集落は連続して継続していたわけではなく、弥生時代中期に人跡が見え初め、その後古墳時代前期、間をおいて奈良・平安時代に展開していることが今回の調査で判明した。その背景には浅川の氾濫平野が狭く、水田可耕地が求められなかったことと浅川の氾濫が要因となっているものと考えられる。

弥生時代中期の土坑は、性格や用途が不明であるが、出土土器は全て破片状態であり遺構廃絶時または近時に投棄された可能性が高い。器種破片にしても甕が多いのに対し、壺は図示した2個にすぎないこともこのことを裏付けていよう。古墳時代前期も住居址形態に不明な点が多く、西区から集中して土器片を採集されたことも該期の様相を考える上で明確な回答を得ていない。土器は有段口縁壺やS字状口縁土器等の外来系土器の影響や甕のヘラケズリ調整、壺口縁部における櫛描条線文等の新たな形態・技法の採用がみられる。一方、甕における波状文、器台・高坏の赤色塗彩等弥生時代の系譜を引き継ぐものもある。奈良時代の住居址にカマド位置の偏在、柱穴を有しないものがあり、平安時代的な様相を示し疑問を残す。しかし、土器においては甕の口縁部が短く外反し、筒形の体部をなし、外面調整に縦ヘラケズリを多用するなど該期の特色を有している。また、須恵器坏底部も非回転のヘラケズリが認められ、これまた該期の典型的な土器である。平安時代の遺構・遺物は9世紀代の所産と考える。



IV-1 調査地周辺の航空写真（平成2年6月撮影（株）ジャステック）

# 浅川扇状地遺跡群 本郷前遺跡

## —大成産業（株）共同住宅建設地点—

### 例 言

- 1 本書は、大成産業（株）代表取締役竹内伊吉と長野市長鷲沢正一との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき実施した緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市三輪4丁目884-9番地に所在する。
- 3 調査は、平成15年9月11日から9月18日に実施し、約200m<sup>2</sup>を調査した。
- 4 遺跡の略号を「A J T」とした。当初浅川扇状地遺跡群城東遺跡と仮称したためで、その後城東地籍内に三輪遺跡（5）と旭幼稚園遺跡が存在することがわかり、本調査地を小字名により本郷前遺跡に改称した。

### 目 次

I 調査の経過	1
1 調査の事務経過	1
2 調査日誌	1
3 調査の体制	2
II 調査地周辺の環境	3
1 地理的環境	3
2 考古学的環境	4
III 調査	7
1 試掘調査	7
2 弥生時代の遺構と遺物	8
IV まとめ	12



## 挿 図 目 次

1 図	調査地位置図.....	2
2 図	大正 15 年測量・昭和 27 年修正図.....	3
3 図	調査地周辺の遺跡.....	4
4 図	旭幼稚園遺跡出土土器実測図.....	5
5 図	試掘坑土層柱状図.....	7
6 図	試掘坑及び調査対象地.....	8
7 図	遺構分布図 .....	8
8 図	1 号住居址実測図.....	9
9 図	1 号竪穴状遺構実測図.....	9
1 0 図	遺構出土土器実測図.....	10
1 1 図	1 号住居址( 1 ～ 14)・ 1 号竪穴状遺構(15 ～ 19)出土土器拓影.....	11

# I 調査の経過

## 1 調査の事務経過

平成15年5月16日 (株) グランベール計画より来所にて埋蔵文化財包蔵地の有無の照会がある。試掘調査が必要である旨回答する。

5月28日付 「試掘調査依頼書」・「土地所有者の承諾書」を受理する。

6月10日 試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地であることを確認する。

6月12日付 「埋蔵文化財確認調査概要報告書」を提出する。

8月8日付 文化財保護法57条の2第1項の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」を受理、12日付で発掘調査が必要である旨を記して長野県教育委員会教育長宛進達する。

8月27日 発掘調査にむけて、事業主体者大成産業(株)・施工業者(株)守谷商会・解体業者美整社と調整協議を行う。

8月27日付 県教委教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」がある。

8月28日付 「埋蔵文化財発掘調査依頼書」を受理する。

9月2日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」、(株)写真測図研究所代表取締役杉本幸治と遺構測量に係わる「業務委託契約書」、(株)守谷商会代表取締役斉藤嘉徳と重機等に係わる「賃貸借契約書」を締結する。

9月11日～18日 発掘調査を実施する。

9月22日付 「発掘調査終了届(通知)」・「埋蔵文化財の発見について(通知)」を関係機関に提出する。

## 2 調査日誌

9月11日～13日 重機・ダンプトラックによる表土除去・搬出作業を行う。

9月11日 調査対象地のうち黒色土堆積物の深い西側半分程の基盤層を追求したところ表土下0.7～1mにあることが判明した。調査範囲を再確認し、東端部から表土除去作業を行う。

9月12日 調査地東端は浅く～50cm程で黄褐色粘質土の基盤層があり、徐々に砂利混じり暗褐色砂質土に変質する。調査地中央より東で大きく潜り込み、これ以西には遺構の存在しないものと判断し調査の対象外とした。

9月16日 遺構検出作業終了後、住居址及び竪穴状遺構の調査を開始する。

9月17日 遺構精査後、写真撮影・土器洗浄作業を行う。(株)写真測図研究所により基準点測量を実施する。

9月18日 遺構測量を行い、現地作業を終了する。



I-1 遺構検出作業



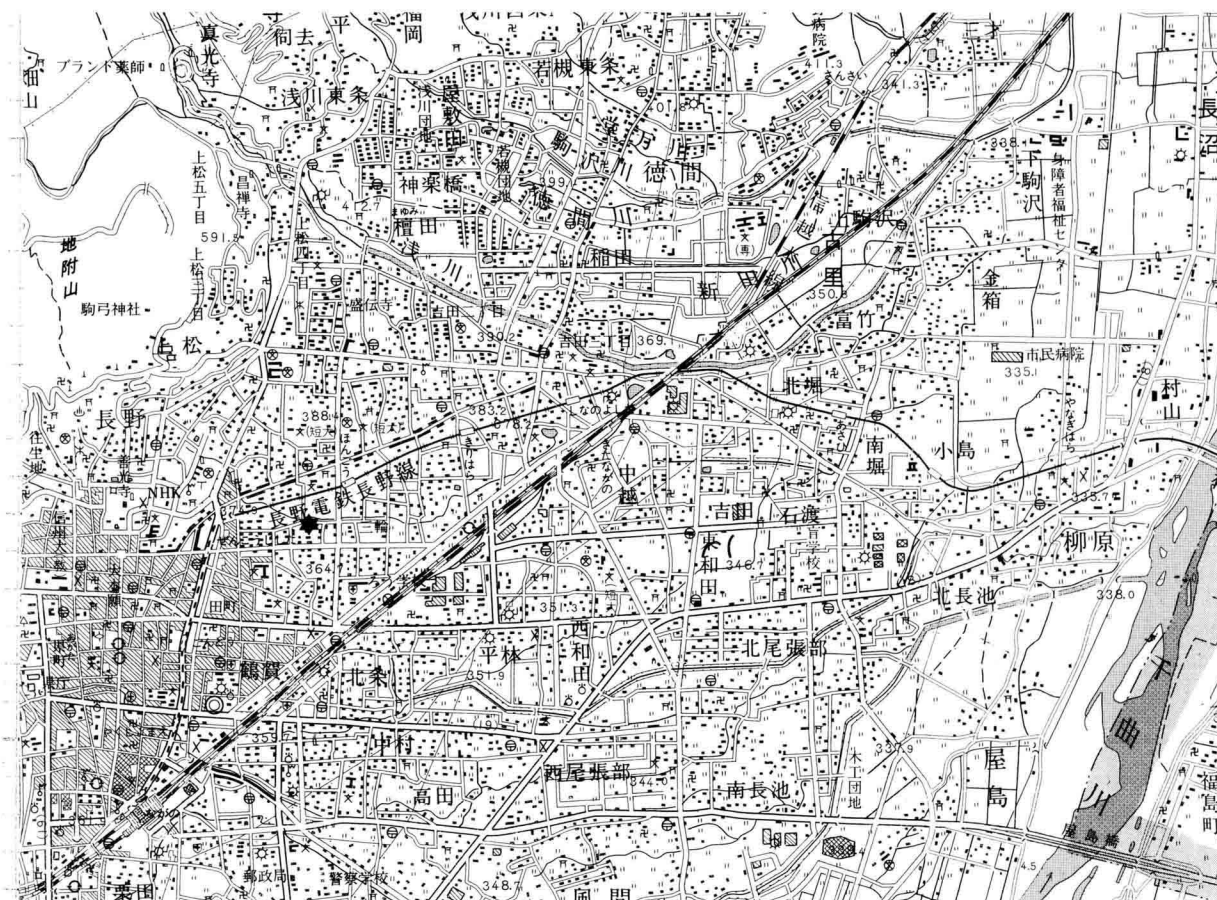
I-2 1号住居址の調査

### 3 調査の体制

埋蔵文化財センターの組織体制については南条遺跡の項を参照にされたい。この節では発掘調査・整理調査に直接担当した職員及び従事者を記する。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 睦秀
総括責任者	副参事兼埋蔵文化財センター所長	磯野 久夫
庶務担当者	係 長	山岸 恒雄（経理・契約事務）
	職 員	吉村 久江（庶務事務）
調査担当者	局主幹兼所長補佐	矢口 忠良（調査主任、報告書編集）
	係 長	青木 和明（保護協議）
	主 事	小林 和子（調査事務、保護協議、試掘調査）
発掘従事者	小畑安市・笠井旭好・金子宣夫・倉島邦子・渋谷幸治・伝田忠志・中澤秀子・松本裕一 吉澤きよ江・若林次郎・和田五男	
整理従事者（調査員）	青木善子・池田寛子・武藤信子・矢口栄子	
遺構測量等委託	（株）写真測図代表取締役杉本幸治	

発掘調査の実施にあたり、大成産業(株)常務取締役中沢勝司・（株）守谷商会営業課係長若林一夫・（株）美整社専務取締役鎌田義信の各氏にはなにかとご協力いただいた。感謝申し上げます。

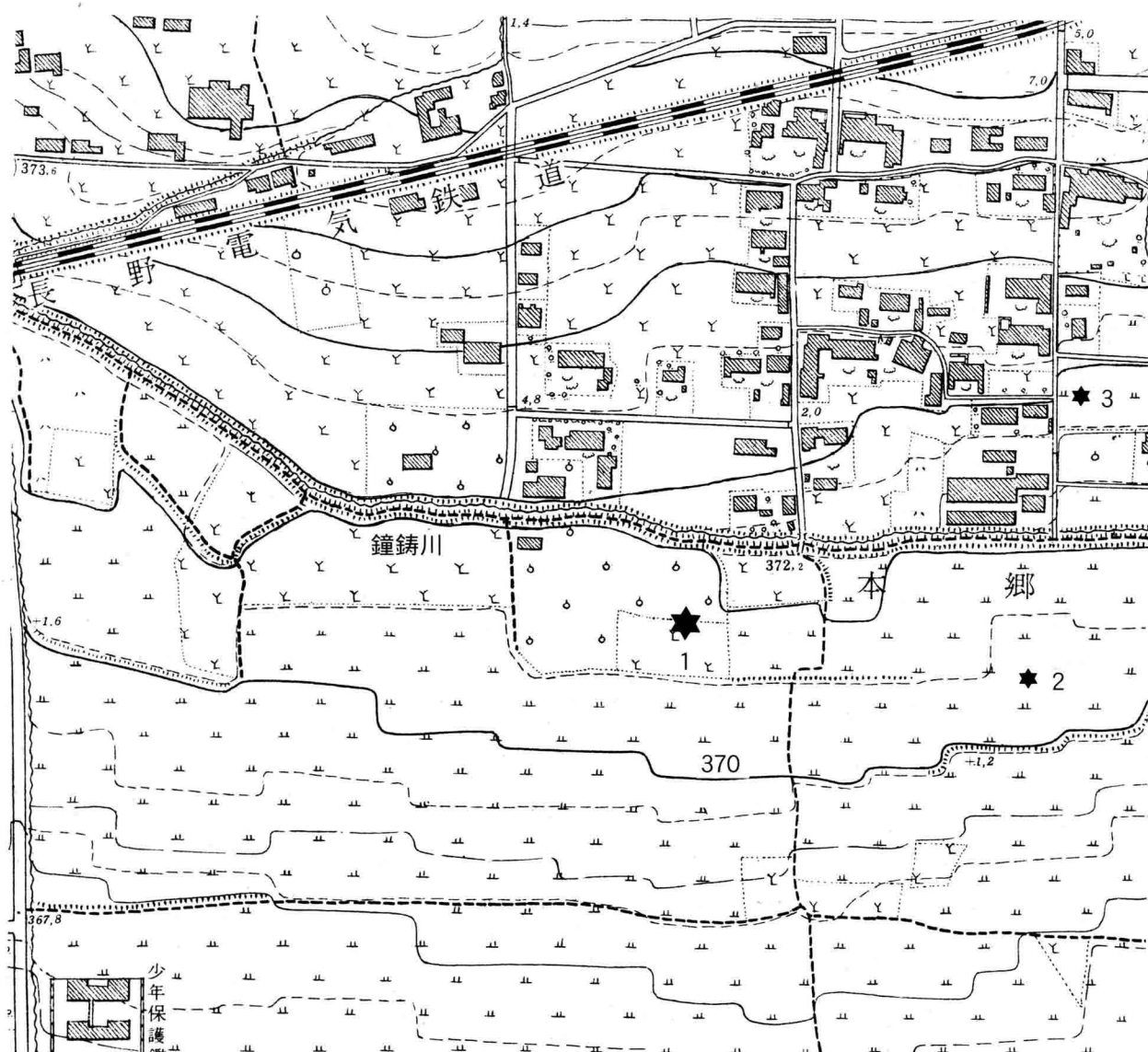


1 図 調査位置図（1：50,000）

## Ⅱ 調査地周辺の環境

### 1 地理的環境

調査地周辺は浅川の堆積物による扇状地、標高369m前後の扇央下部に位置している。大正14年測量・昭和27年修正図（2図）によれば鐘鑄川より北側は市街化の傾向がみられ、空き地の地目利用は桑畑が主体を占めている。これに対し南側は一面水田が展開しているが、調査地は鐘鑄川の南に近接する位置にあるが上流部にかけて桑畑・果樹園がみられ、微高地の様相が窺える。下流域は水田として利用されている。ただし、調査日誌の項や試掘調査の項で略記したとおり、基盤層は西に沈み込み、東にかけて地形に直交するような帯条微高地を形成しているようである。旭幼稚園遺跡と三輪遺跡（5）は共に水田地目下にあり、本調査地の微高地が当該遺跡にまで及んでいるのか今のところ不明である。遺物の年代からはその可能性は否定できない。



1. 本郷前遺跡（調査地） 2. 旭幼稚園遺跡 3. 三輪遺跡（5）

2図 大正15年測量・昭和27年修正図（1：3,000）

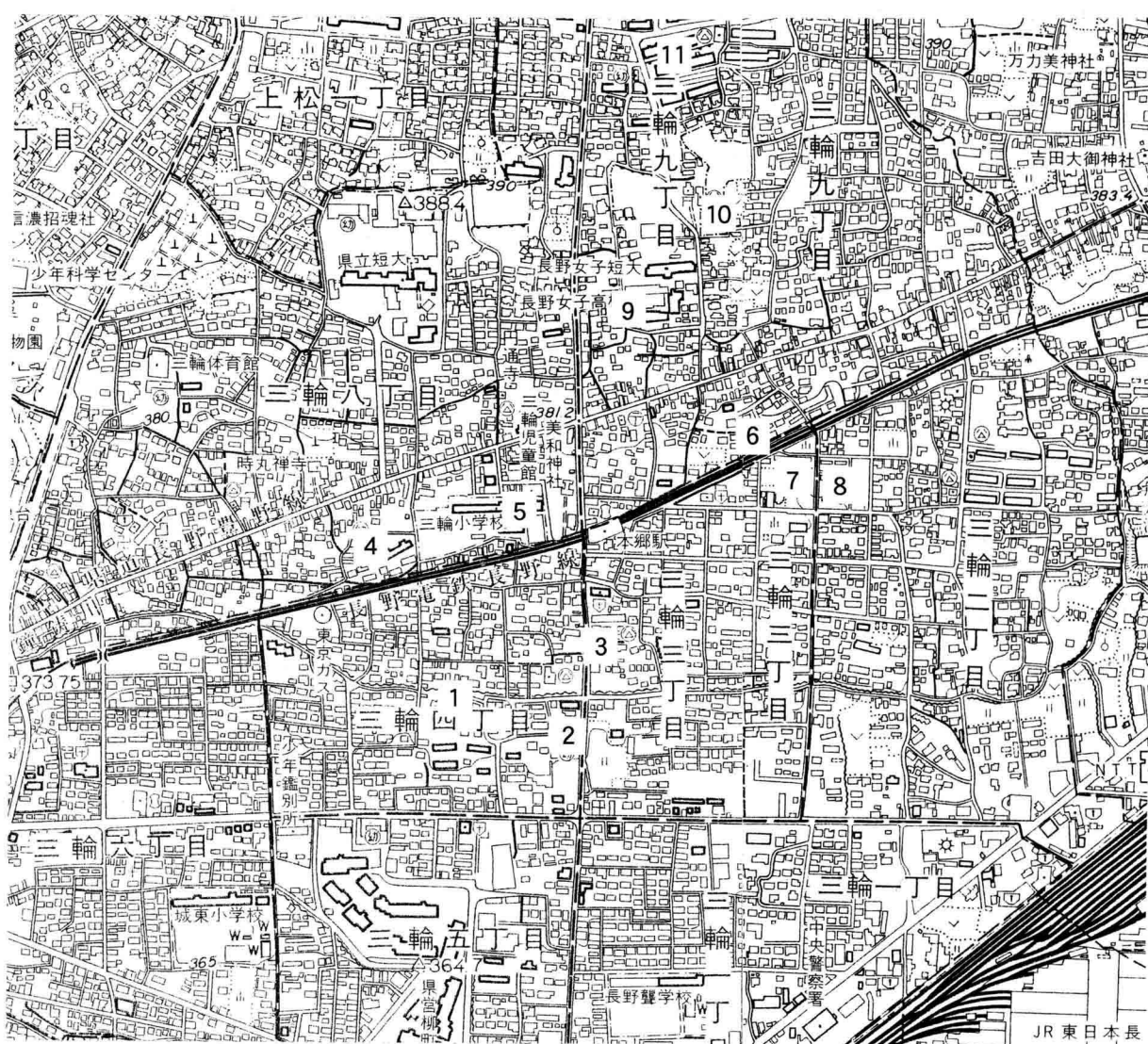
## 2 考古学的环境

三輪地籍には数多くの埋蔵文化財の包蔵地が知られている(3図)。しかし、市街化とそれに伴う地形の改変により遺跡範囲の把握が十分でなく、総体としての複合遺跡を形成するのか単独地形上の遺跡なのか不明の部分が多い。以下地点遺跡として概要を記載する。

## 2 旭幼稚園遺跡

三輪遺跡群の中で最も扇状地の下位に位置する遺跡であり、今回調査した本郷前遺跡と関係の深いものと考えられる。昭和42年幼稚園建設時に発見され、住居址と思われる落ち込みから弥生時代中期後半の土器が多量に出土している（4図）。

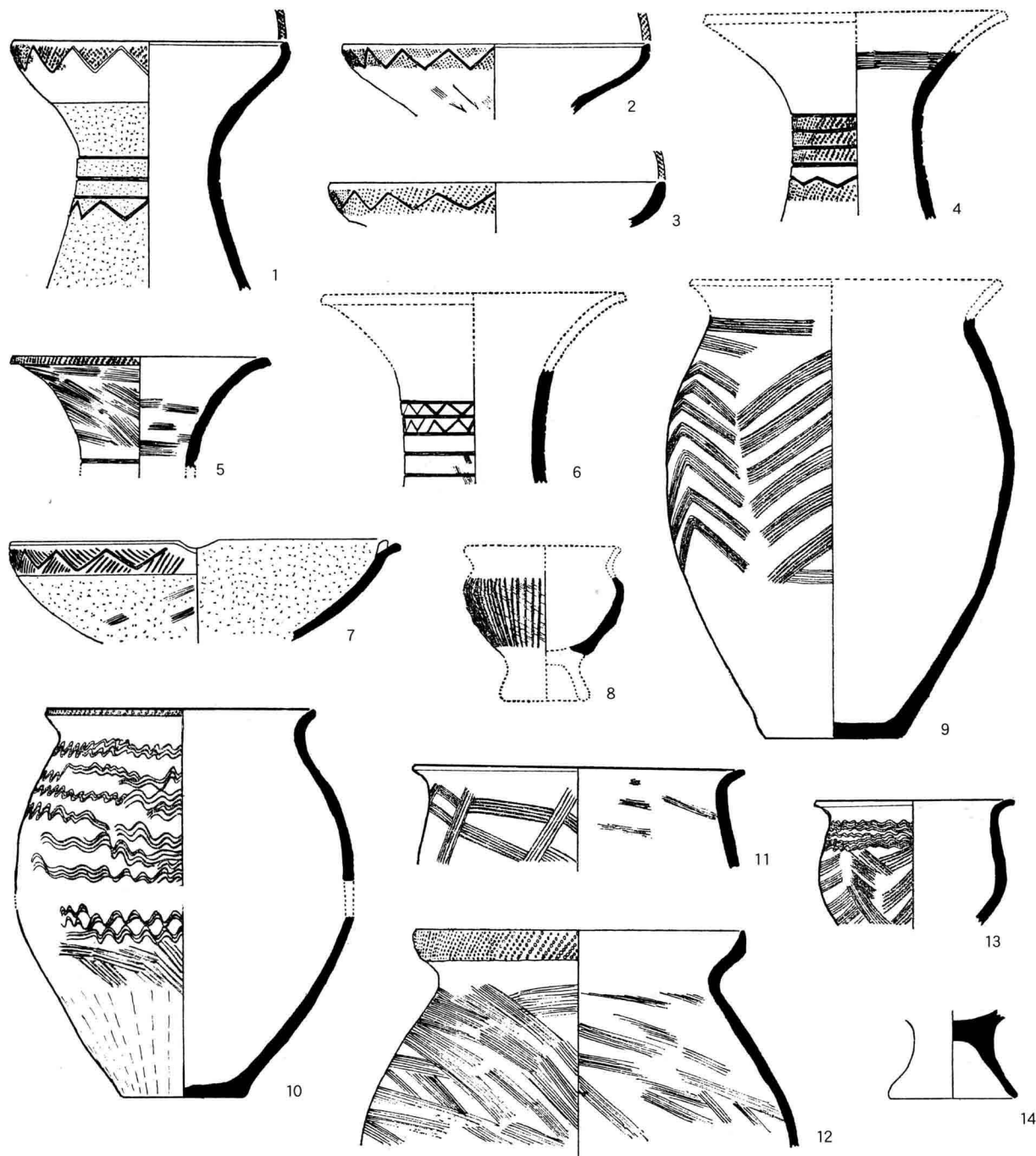
上水内郡誌編集会『上水内郡誌（歴史編）』昭和51年



1. 本郷前遺跡      2. 旭幼稚園遺跡      3. 三輪遺跡(5)      4. 三輪遺跡(6)      5. 三輪遺跡  
6. 三輪遺跡(2)      7. 三輪遺跡(4)      8. 三輪遺跡(3)      9. 下宇木B遺跡      10. 美和公園遺跡  
11. 下宇木遺跡

3 図 調査地周辺の遺跡 (1 : 10,000)





4図 旭幼稚園遺跡出土土器実測図（1：4，『上水内郡誌歴史編』より転写・改変）

### 3 三輪遺跡（5）―（仮）滝沢マンション建設地点―

平成5年度に約280㎡を発掘調査し、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居址1軒・溝址1条・土坑2基・井戸址1基を検出した。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡（5） 小島柳原遺跡群上中島遺跡』平成6年

### 4 三輪遺跡（6）―三輪保育園建設地点―

平成7年度に改築事業に先立って約460㎡を発掘調査し、弥生時代中期の土坑1基・同後期の住居址2軒、古墳時代前期住居址1軒・同後期住居址1軒、奈良時代住居址2軒と土坑1基を検出した。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群吉田四ツ屋遺跡 浅川扇状地遺跡群三輪遺跡(6) 藁河原遺跡』平成8年



## 5 三輪遺跡—三輪小学校建設地点—

三輪小学校校舎改築に伴い、昭和50・51・53年度の3次にわたり約2,200㎡を発掘調査した。1次調査では古墳時代後期の住居址2軒と時期不明の溝址1条を確認した。住居址2軒の内1軒は一辺の規模が5m台のもので、この時期としては普遍的な住居址であるのに対し、もう1軒は一辺10m前後を測る大型の方形住居址である。床面上には建築部材等多量の炭化材が散在していた。2次調査では古墳時代中期と平安時代住居址7軒・溝址2条を検出し、古墳時代の住居址から古式須恵器が出土している。3次調査では弥生時代後期から古墳時代後期の住居址7軒・土坑2基を検出した。

長野市教育委員会『三輪遺跡』昭和55年

## 6 三輪遺跡（2）—本郷住宅造成地点—

長野電鉄（株）による宅地造成事業地で、昭和61年度に道路敷部分約450㎡を発掘調査した。古墳時代後期から平安時代に至る住居址6軒・溝址4条・土坑1基を検出している。

長野市教育委員会『三輪遺跡（2）』昭和62年

## 7 三輪遺跡（4）—長野県職員宿舍建設地点—

平成4年度に本郷団地建設地点の道路を挟んで西側約900㎡について発掘調査を実施した。平安時代の住居址2軒・溝址7条・土坑4基・竪穴状遺構2基・掘立柱建物址1棟を検出した。また、中世以降の所産と思われる五輪塔埋納遺構が確認されている。

長野市教育委員会『浅川扇状地遺跡群三輪遺跡（4）』平成5年

## 8 三輪遺跡（3）—本郷団地建設地点—

起因事業は国鉄精算事業団の宅地分譲によるもので、平成2年度に約300㎡を発掘調査した。弥生時代後期住居址1軒・土坑1基、平安時代住居址3軒、中世土坑5基が確認された。

長野市教育委員会『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡（3）』平成3年

## 9 下宇木B遺跡

昭和43年に下水道掘削工事中に発見された遺跡で、古墳時代前期の大型の二重口縁壺・埴・小型丸底鉢・甕等の器種が一括出土している。

笹沢 浩「長野市下宇木遺跡B地点出土の土師器」『長野県考古学会誌8号』昭和45年

## 10 美和公園遺跡

昭和58年に造成事業に伴い発掘調査を実施した。古墳時代住居址1軒や直径25cmの柱痕が残存する柱穴2個を検出した。柱穴は掘立柱建物址の存在を予想させる。

## 11 下宇木遺跡

公営住宅建設事業・市道拡幅改良事業に伴い平成2年度に約1,100㎡を発掘調査した。調査では弥生時代後期の住居址6軒、古墳時代中期から後期の住居址10軒等を検出した。

長野市教育委員会『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡（3）』平成3年

### Ⅲ 調 査

#### 1 試掘調査

調 査 日 平成15年 6 月10日

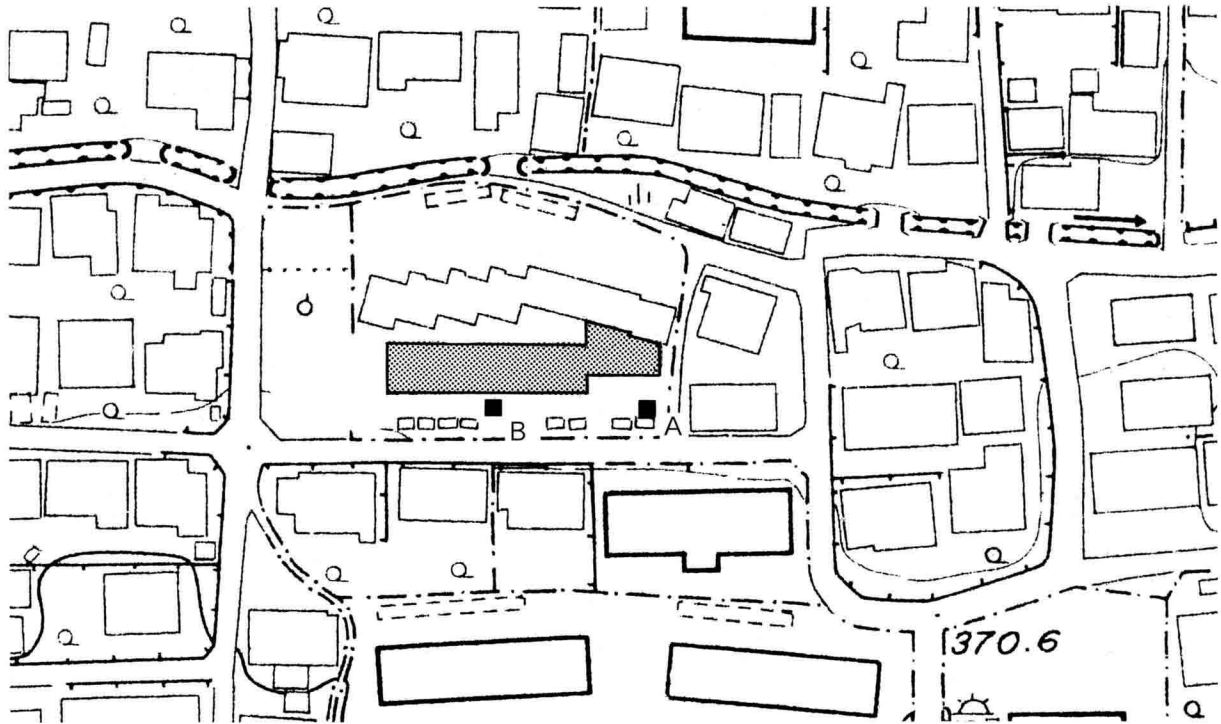
調査の方法（6 図） 事業予定地内の任意の地点に試掘坑を 2 ヶ所設定し、小型重機により掘削する。坑内断面の土層観察により遺物包含層・遺構の有無及び深さを確認する。

調査結果（5 図） A 地点では表土下第 2 層は盛土による砂利となり、第 3 層で暗灰色土、第 4 層では黒色土、第 5 層は黄褐色土、第 6 層は砂利混じりシルトになる。第 3 層からは炭化物および土器片が出土し、第 4 層に土坑状落ち込みが認められた。B 地点では－60cm 程まで盛土または攪乱層と考えられ、一応層序分離したものの整合面ではない。第 5 層は暗灰褐色土、第 6 層は黒褐色土、第 7 層が淡灰褐色砂質土になる。第 5・6 層で極微量の炭化物が検出され、遺物包含層の可能性のあるものの土器片の出土は認められない。

これらのことから A 地点は良好な埋蔵文化財包蔵地であり、B 地点は遺跡の縁辺部の可能性も考えられる。

A 地点	地表面から	B 地点	地表面から
第1層 表土	0cm	第1層 表土	0cm
第2層 砂利(盛り土)	－ 15cm	第2層 暗褐色土	－ 10cm
第3層 暗灰色土	－ 45cm	第3層 褐色土	－ 30cm
第4層 黒色土 (遺物包含層)	－ 60cm	第4層 灰褐色土(橙土混) (以上盛土)	－ 42cm
第5層 黄褐色土 (基盤層)	－ 75cm	第5層 暗灰褐色土 (遺物包含層?)	－ 60cm
第6層 灰褐色シルト(砂利混)	－ 105cm	第6層 黒褐色土 (遺物包含層?)	－ 80cm
		第7層 淡灰褐色砂質土	－ 103cm
		第8層 暗黄褐色砂質土	－ 112cm

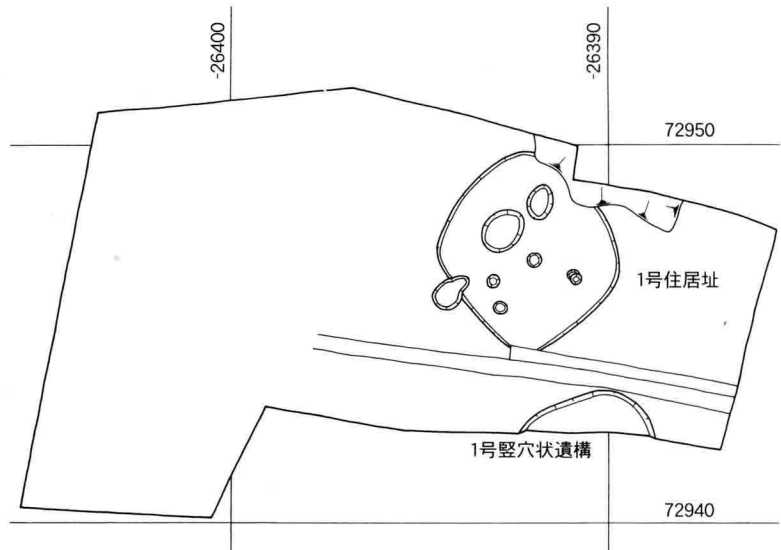
5 図 試掘坑土層柱状図



6図 試掘坑及び調査対象地（1：5,000）

## 2 弥生時代の遺構と遺物

検出した遺構はすべて試掘調査A地点に近接し、調査対象地の東端に位置する。基盤層は東端付近が黄褐色粘質土であるのに対し、1号住居址の中央付近から西へ徐々に砂利混じり暗褐色砂質土に変質する。更に、調査地東端から15m付近からは1m近く緩斜面をもって落ち込む。また、地形的に扇状地上下位にあたる試掘坑A地点との基盤層に20cmの比高差が生じているが、更地の際の凹凸によるものと思われる。



7図 遺構分布図（1：200）

### (1) 住居址

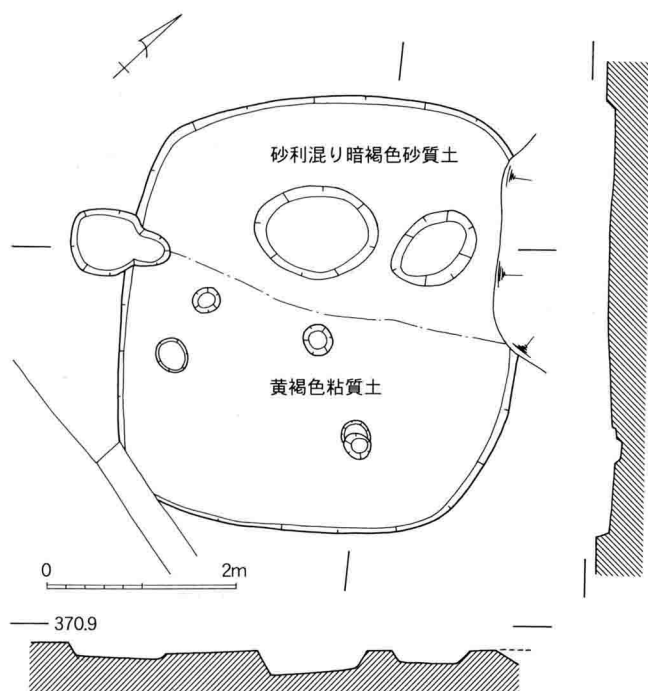
**1号住居址（8図）** 遺構のほぼ全形を露呈したが、北西隅部と北壁の一部が雨水排水管理設により破壊を受け形態が不明な所がある。覆土は砂利混じり黒色砂質土である。形態は円形に近い不整隅丸長方形を呈し、長軸（南北）4,65m・東西4,22mの規模になる。長軸方向はN42° Wを指す。掘り込みは南壁が最も深く14cm、北壁12cm、東壁・西壁中央でそれぞれ12cm・8cmを測る。床面は堅緻で平坦であるが南に向け傾斜を有する。遺構内北側と西壁に不整楕円形を呈する土坑状掘り込みがみられるが、遺物の出土は無く当住居址に属するものか、別の単独遺構か決め手をもたない。ちなみに住居址内の東のものは長軸0,96m・東西0,7m・床面からの深さ14cm、

西のものは長軸1,3m・南北1,0m・深さ23cmをそれぞれ測る規模である。支柱穴と思われる小穴が南東隅部1個確認されるにすぎない。土坑状遺構と重複していても南西隅部から検出されない点注意される。また、炉および焼土等も認められなく、通常の住居址の在り方と趣を異にする。住居としての機能前に何らかの事態により放棄された可能性が高い。遺物の出土状態にしても住居址中央付近に集中しており、床面直上からの破片が多いことから投棄遺物と考えられる。

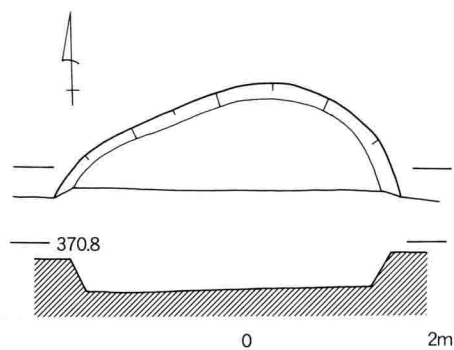
**遺物（10・11図）**は12の高杯を除き他は当遺構出土の一括資料であるが、包蔵土質のためか残存状態は良くない。器種には壺（1～4）・甕（6～9）・甑（11・12）がある。1は口縁部が受け口状になり、L Rの縄文が施される。頸部には擬隆帯の平行沈線文が巡る。この土器は1号竪穴状遺構出土の破片と接合関係にある。2と3は細頸壺で、2には1条の沈線文、3には3条の平行線文と山形文が巡る。3の擬隆帯には篳描刺突文が施される。6は口縁部に最大径があり、1次調整がヘラケズリの可能性があり器壁が薄い。外面は全面にハケナデがみられる。7は口縁部が受け口状になり、文様は施されない。6・7共に北陸系土器の影響を受けているものと思われる。8の外面の施文は櫛による波状文が巡る。拓影図（図1～14）では1～7は壺で、他は甕である。1・2の口縁部はL R縄文が施文され、1は片口になる。3・4は頸部の破片で、文様には平行線文・山形文・縄文がみられる。5～7は体部の破片で、6には櫛描平行線文を充填する懸垂文が施文されている。甕には櫛描文が多用され、体部に波状文（8・9・14）・斜行線文（10～14）、頸部に簾状文（10）・平行線文（13）がみられる。口唇部には縄文（9・13）・指頭押圧文（10）が施文される。総体に弥生時代中期後半の様相を窺わせる。

## (2) 竪穴状遺構

**1号竪穴状遺構（9図）** 1号住居址の南側からの検出であるが、北側の一部を露呈したにすぎず大部分は南側調査区域外にあるものと思われる。また、北壁の一部は下水道管理設により破壊を受けている。形態は隅丸方形あるいは長方形を予想する。東西の規模は推定3,7m代で、東壁での掘り込みは深く37cmを測る。底面は淡黄色砂土で軟弱である。ちなみに覆土は砂利混じり黒色粘質土である。柱穴や焼土が認められなく、床面の状態を考慮し竪穴状遺構とした所以である。土器の出土はすべて覆土からのものである。



8図 1号住居址実測図（1：80）

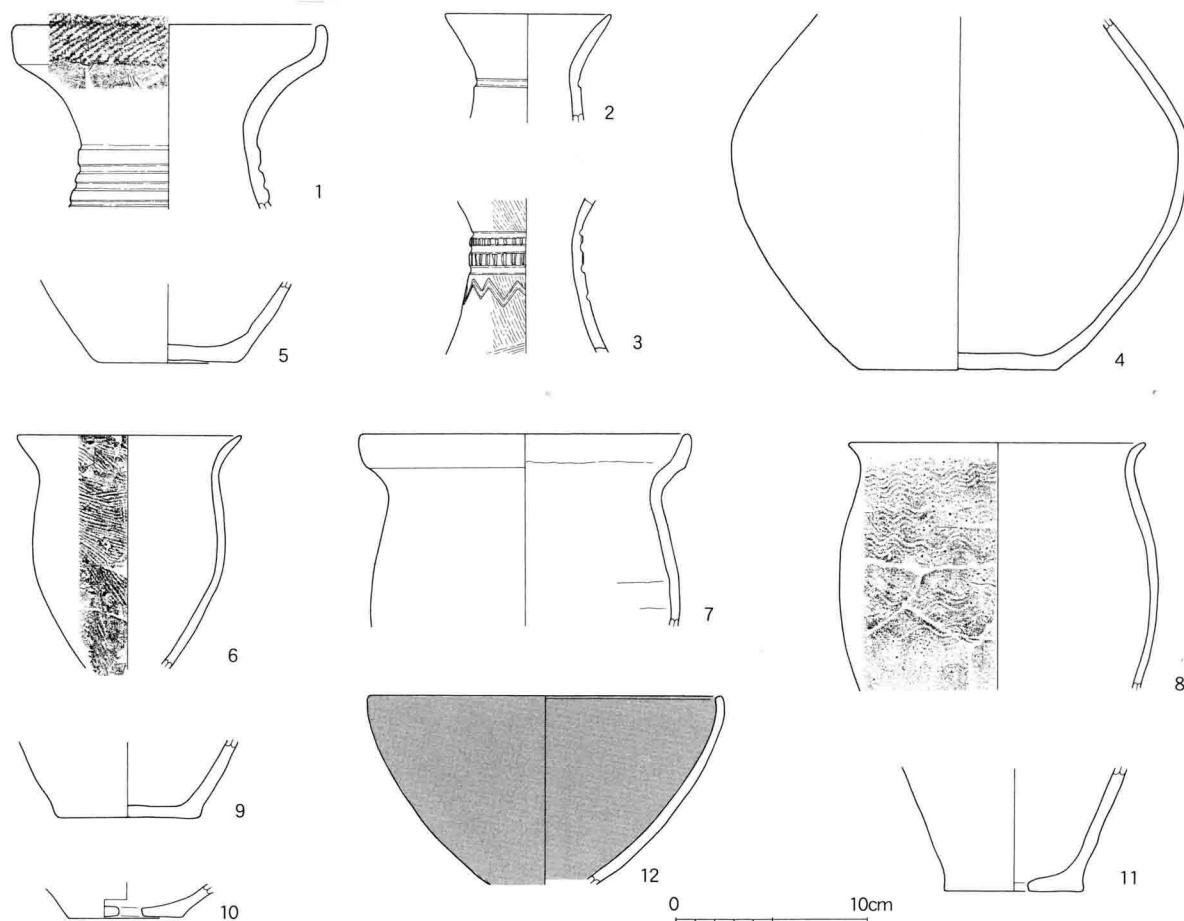


9図 1号竪穴状遺構実測図（1：80）

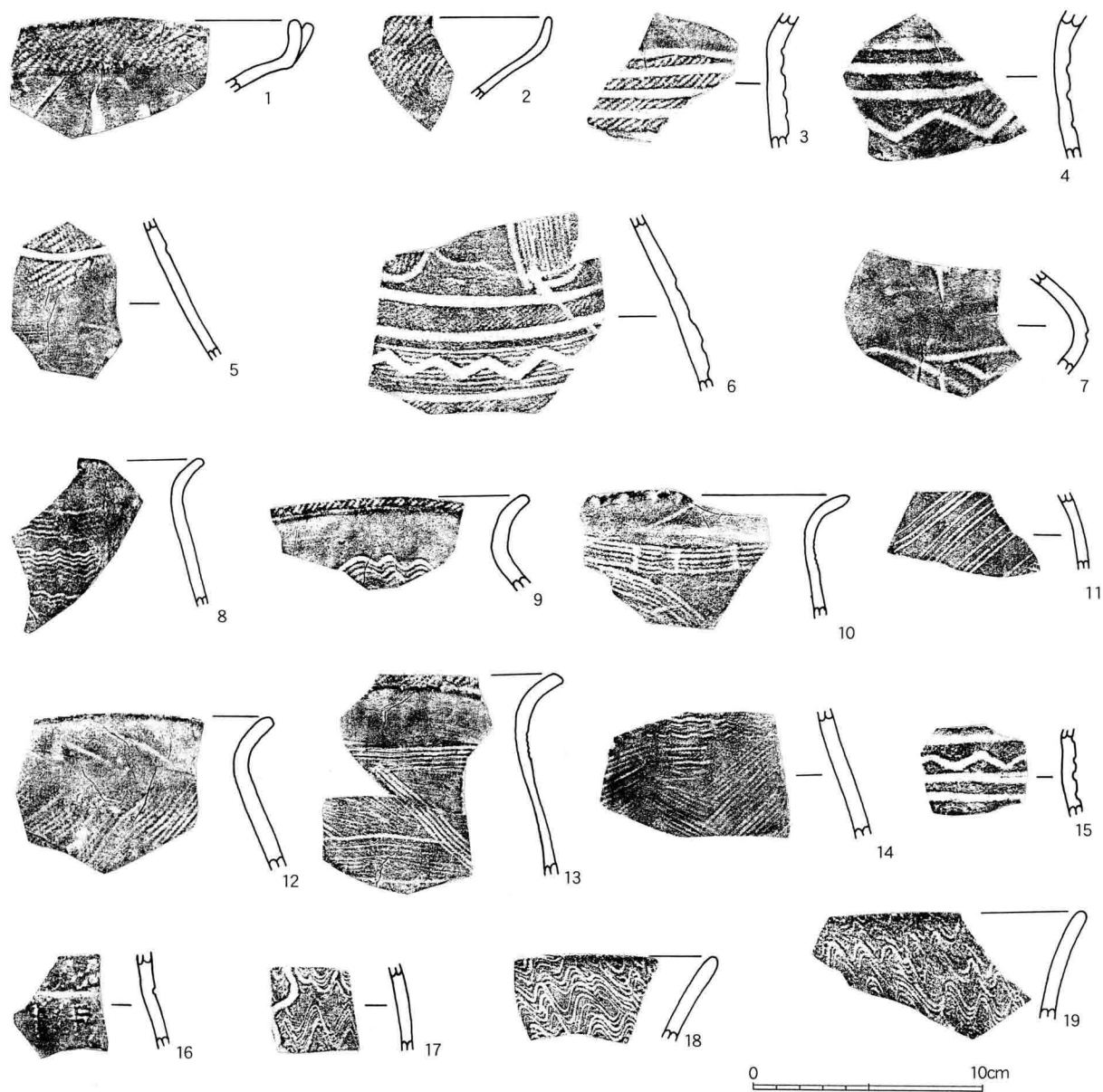
遺物（10・11図）の出土量は少なく、全て破片である。図上復元可能なものは14の高坏が1個体あるにすぎない。高坏は碗形の器形で、内外面共にヘラミガキ調整で赤色塗彩が施される。小破片では壺（15・16）と甕（17～19）が認められる。図15は篋描沈線文が巡り、16には沈線文と櫛描簾状文が施文される、甕は櫛描波状文を主体とするが、17には垂下する篋描蛇行文がみられる。18・19は外面全体に波状文で充填施文しており、弥生時代後期の所産である。



Ⅲ-1 1号住宅址



10図 遺構出土土器実測図（1：4、12のみ1号竪穴状遺構）



11図 1号住居址（1～14）・1号竖穴状遺構（15～19）出土土器拓影（1：3）



Ⅲ-2 1号竖穴状遺構



## IV ま と め

共同住宅建設地（調査対象地）の内、遺構の存在を確認したのは調査地の東端部にすぎなかった。基盤層が黄褐色粘質土層と安定しており、扇状地地形に直交するような帯状微高地の展開が予想され、その上に集落が形成されたものと思われる。ただし、その範囲を確定する資料は持ち合わせないが、遺物・遺構等から少なくとも旭幼稚園遺跡まで想定しても良いのではないかと考える。検出した遺構は弥生時代中期後葉の住居址1軒と竪穴状遺構1基のみである。両遺構とも土器に接合関係があり、同時に存在していたものと考えられる。遺構数が少なく住居機能に問題を残すため本遺跡の性格も明確にできないが、旭幼稚園遺跡を含めて弥生中期には小集落が形成されていた可能性が高い。生産基盤としての水田可耕地を微高地両端の凹地に求められる。1号竪穴状遺構から後期の甕の破片が出土しており、近隣に遺構の存在が推測されるにすぎない。もう一つ重要なことは、鐘鋳川より南側の扇状地には遺跡が存在しないものと考えられてきたが、遺跡の在り方について再考する必要性を提起したことである。



IV-1 調査地周辺の航空写真（平成2年6月 提映：(株)ジャステック）

# 報告書抄録

ふりがな	しののいみなみじょういせき あさかわせんじょうちいせきぐんたつみいけいせき あさかわせんじょうちいせきぐんほんごうまえいせき							
書 名	篠ノ井南条遺跡 浅川扇状地遺跡群辰巳池遺跡 浅川扇状地遺跡群本郷前遺跡							
副 書 名	布施高田宅地造成地点 吉田宅地造成地点 三輪共同住宅建設地点							
シ リ ー ズ 名	長野市の埋蔵文化財							
シ リ ー ズ 番 号	第103集							
編 著 者 名	矢口忠良 風間栄一 宮川明美							
編 集 機 関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL026-284-0004 FAX026-284-0106							
発 行 年 月 日	2004年3月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		経緯度※		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 経			
しののいみなみじょういせき 篠ノ井南条遺跡	ながのけん ながのし 長野県長野市 しののい ふ せ たかだ 篠ノ井布施高田 1051-1他	20201	E-036	36° 34′ 40″	138° 08′ 42″	20030528 ～ 20030612	5 0 0 m <sup>2</sup>	宅地造成
たつみいけいせき 辰巳池遺跡	ながのけん ながのし よしだ 長野県長野市吉田 さんちようめ 三丁目1137-7他		A-065	36° 39′ 58″	138° 13′ 48″	20030630 ～ 20030728	5 0 0 m <sup>2</sup>	宅地造成
ほんごうまえいせき 本郷前遺跡	ながのけん ながのし 長野県長野市 みわ よんちようめ 三輪四丁目884-9		A-061	36° 39′ 25″	138° 12′ 16″	20030911 ～ 20030918	2 0 0 m <sup>2</sup>	住宅建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
篠ノ井南条遺跡	集 落 跡	平 安 時 代 中 世	竪穴住居 3 溝 5 土 坑 13 井 戸 1 小 穴	土 器 土師器・須恵器・内耳土器 陶磁器 灰釉陶器・青磁			平安時代 中葉の小 集落	
辰巳池遺跡	集 落 跡	弥 生 時 代 古 墳 時 代 奈良平安時代	竪穴住居 10 溝 4 土 坑 3 小 穴	土器 縄文土器・弥生土器・土師器・ 須恵器			浅川縁辺 の小集落	
本郷前遺跡	集 落 跡	弥 生 時 代	竪穴住居 1 竪穴状遺構 1	土 器 弥生土器			浅川扇状 地扇端部 の小集落	

長野市の埋蔵文化財第103集

篠ノ井南条遺跡

浅川扇状地遺跡群

辰巳池遺跡

浅川扇状地遺跡群

本郷前遺跡

平成16年1月26日 印刷

平成16年1月30日 発行

編集 長野市教育委員会  
発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 奥山印刷工業株式会社